

---

# Get married!

田中タロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Get married!

### 【Nコード】

N8231S

### 【作者名】

田中タロウ

### 【あらすじ】

アメリカに留学中の元気娘・春美。腹痛で倒れているところをデイクプリオバリの美青年に助けられる。そして2人は思わぬ形で再会するのだが・・・

## 第1話 デイカプリオ

―― アメリカのストリートで、日本人女性の坂上春美さかがみはるみさんが死亡。

病死と見られる ―――

ああ、きっと明日の日本の新聞にはそんな記事が載るんだわ。

でもせめて「日本人美人女性」にしてよね。

それでも日本にいたころは巷じゃ有名な美少女だったんだから。

でも、どんなに美少女でも、19歳で死んだんじゃ意味ないか。

私は、決して人通りが少なくないストリートの脇にしゃがみこんだ。

痛い・・・

どうしてこんなにお腹が痛いのか？

まあ、原因は昨日飲んだ生水だろうけど。

後、ちよっとお肉とケーキも食べ過ぎたのよね。

それにしても、どうして誰も助けてくれないの？

異国の地で美しい日本人女性がこんなに苦しんでるのに・・・

こういう時は、目も見張るような美青年が、

私をふわっと抱き上げて病院に運んでくれるんじゃないの？

でも、現実にはそんなこと有り得ないって、私だって分かってる。

思えば私は周囲から「さぞかしモテるんだろう」と思われ続けてき

た割りに、男運がない。

中1の時に初めてできた彼氏は、やたらと先を急ぎたがる奴で、キスマでは許したけど、それ以上を私が渋るといつも不機嫌になった。

高1の時にできた2人目の彼氏は、申し分なかった。

かっこいい社会人で優しく、紳士的で。

だけどこれは私が悪かった。

見た目だけは良い小悪魔男に引かかり、自分から彼氏を手放してしまったのだ。

しかもその小悪魔男はあっさり私を捨てて、  
こともあろうに私のお姉さんの存在の先輩と付き合い始めた。

これを、「男運がない」と言わずして、なんと言おう。

ああ、せめて死ぬ前に素敵な彼氏を作って死にたかった・・・  
だけでももう手遅れ。

私はこのままここで、1人寂しく死ぬんだわ・・・

というわけで、第1話にしてこの物語は終了です。

さよなら、みなさん。

アーメン、ソーメン、ラーメン・・・

あー。もう一度日本の豚骨ラーメン、食べたかったなあ。

油を追加するのが最高なのよね。

カロリー高いし、身体に悪いのは分かってるんだけど、あればかりはやめられない。

そうよ。

あの油たっぷりの豚骨ラーメンを食べるまでは死んでも死に切れないわ！

悲壮感さえ漂う表情で顔を上げた、その時。

不意に私の身体が宙に浮いた。

「Are you OK？」

OKな訳、ないでしょ。

私がかすかに首を振ると、再び英語が私に投げかけられた。

一応断っておくと、私はこれでも日本のエリート高校からアメリカに留学してきて1年半以上経つ。

英語だってペラペラだ。

でも、死に瀕している今、英語を理解する余裕はない。

せめてもと思い、頑張って目を開くと、

キラキラ光る金髪と、青く優しげな瞳が見えた。

おお。ディカプリオじゃん。

・・・そんな訳ないか。

でも、ディカプリオも真っ青なくらいの美青年が目の前にいる。

これって夢？

夢でもいいや。

最後くらい、いい夢見ながら死にたいじゃない？

どーせ、彼氏いないんだし。

ああ、でも、ラーメン・・・

必死の抵抗も虚しく、私の意識は闇の中へと引き摺り込まれて行った。

「Are you OK?」

さっきと同じ言葉で、私は目を覚ました。

でも、さっきは男の人の声だったけど、今度は女の人の声だ。

それだけでこんなにもテンションが変わるものか。

私はボサボサであろう頭をかきながら、ベッドから起き上がった。朦朧としている脳を英語モードに切り替える。

「はあ、大丈夫です、一応。ここは天国ですか?」

「天国?」

白衣を来た女の人が目丸くした。

「ここは病院。あなた、道で倒れてたのよ。」

通りかかった人がタクシーでここまで運んでくれたの」

段々記憶がはっきりしてくる。

そうだ。私、お腹が痛くて道で野たれ死んで・・・は、いなかったようだ。

「私、生きてる！」

「当たり前じゃない。食あたりじゃ死なないわ」

「・・・」

いや。そんなことはない。

あの痛みは尋常じゃなかった。

きっと私、どこか身体が悪いんだ。

一人でブツブツ言っていると、無情にも女医さんは「もう帰っていわよ」と言い放った。

あれ。私、本当に元気なのかな。

「あのー・・・。私をここまで運んでくれた人って・・・」

「背の高い男の人だったわよ」

「金髪で青い瞳の？」

「ええ」

夢じゃなかったんだ！

私はベッドから飛び降り、女医さんに詰め寄った。

やっぱり元気らしい。

「その人は！？」

「あなたをここに置いて、帰ったわ。仕事があるって」

「名前は！？連絡先は！？お礼、言いたいですけど！」

「知らないわよ」

冷た！

そんなんじゃお客さん減るわよ！

最近はお客満足度、英語でCustomer satisfaction、略してCS！が物を言うんだから！

って、ここは病院でこの人は医者か。

で、でも医者にだってCSがある、はず！

あ、だけど「お客」ってのは変よね、「患者」か。

「患者」は英語で・・・なんだっけ？

「何ブツブツ言ってるの？ patientがたくさん待ってるし、ベッドに余裕もないから、もうお腹が痛くないなら帰って欲しいんだけど」

そうそう。patientよ、patient。

では改めて。

そんなんじゃお客さん、じゃなかった、患者さん、減るわよ！

最近はお客満足度、英語でPatient satisfaction、略してPS！が物を言うんだから！

「まだ何か？」

「いえ・・・ありがとうございました」

私は日本人らしく殊勝な態度でお礼を言うと、病室を出て・・・驚いた。

受付のロビーにズラツと人が並んでいたのだ。



どうやら、人気の病院らしい。  
そう言えば、私もお腹全然痛くないし・・・

腕のいい医者さんみたいね。  
ふんっ。

ところが更に驚いたことに。

「あ。あなた、さっき食あたりで倒れて運ばれた人ですね」

順番待ちをしている患者さん達がクスクス笑う。

声が大きいわよ、受付のねーちゃん。

恥ずかしいんですけど。

「お支払いは、あなたを運んでくれた男性がしてくれました。  
でも、かなり多めにお金を置いていかれたんです。お釣り、渡しと  
いてもらえますか？」

は？

どこの誰だ分らないんですけど。

と、言う前に、私の手の中に100ドル札が何枚も押し込まれた。

## 第2話 小悪魔男

「ふーん。で、そのディカプリオにコロッといっちゃった訳ね」

大学内のカフェテリア（学食みたいなもんだ）で、リザが呆れたように言った。

「誤解しないでよ！私は純粹に彼の人となり・・・」

「人となりって言っても、イケメンで金持ちらしいってことしか分からないんですよ？」

「見ず知らずの私を病院まで運んでくれたのよ！？イケメンで金持ちで優しいのよ！」

「・・・」

リザは何かを諦めたのか、それ以上何も言わずにランチを食べ始めた。

何よ？文句ある？

道で行き倒れてた私を病院に運んで、名前も言わずに500ドルも払っていつてくれたのよ？

惚れてもいいでしょ！

「昨日、春美が大学に来なかった理由は分かったわ。今日遅刻したのは？」

「あの道でディカプリオを待ち伏せしてたの」

「来たの？」

「来なかった！」

私はアメリカンなサイズの肉にドンツとフォークを突き立てた。

「どうして来ないのよ!？」

「昨日はたまたま仕事でその道を通っただけなんじゃない？」

「じゃあ私はもう彼に会えないってこと!？」

「じゃない？ お釣りはありがたく頂いておきなさいよ」

そーゆー問題じゃない!!!

私は肉付きフォークを手に、毅然として立ち上がった。

「絶対に見つけ出してやるんだから!」

「・・・なんか、親の仇でもとるみたいね」

「その覚悟よ!」

あんな上玉、逃してなるものか!

何のためにアメリカまで来たと思ってるのよ!

「勉強するためじゃないの？」

「それもあるけど」

「レポートの提出期限、明日よ」

「・・・」

一気に気持ちが醒めて、私はストンと椅子に腰を落とした。

リザは私のテンションを落とす天才だ。

私は仕方なく食事をさっさと終わらせてレポートに取り掛かろうと思っただけ・・・

「そうだ、春美。面白い話があるんだけど」

突然リザがテーブルに身を乗り出してきた。  
目が妖しく光っている。

「面白い話？」

「日本人と日系人の女の子限定のオーディションがあるの！一緒に受けてみない？」

「何のオーディション？」

「それが分からないの。ただ口コミでそういう噂が広がってて」

何それ。怪しすぎ。

一応説明しておく、リザは日系2世。

ただ見た目はラテンの血が濃く、綺麗には綺麗だけどあんまり日系人には見えない。

私が高校3年の時に留学してきて以来の友人だ。

私は高校卒業後、日本の大学に進むことも考えたけど、アメリカに残ることにしたのはリザの存在が大きい。

「やめようよ。お金とか取られたらヤだし」

私はそう言ったけど、好奇心旺盛なリザは引かない。

「大丈夫。主催はあのジュークスだから」

「ジュークス？」

世界でも有数のソフトウェア会社だ。

そんなところが口コミでオーディション参加者を募るなんて

（しかも何のオーディションか分からない）  
やっぱりおかしい。

「私、パス。リザもやめといった方がいいよ」

「えー？ 一緒に行こうよ！」

首を横に振ったその時、カフェテリアの入り口に見慣れた人影を見つけた。

同時に向こうも私に気付き、足早にやってくる。

右耳に赤いピアスを付けた、ちよつと目を引く可愛い日本人の男の子。

こいつこそが、私を地獄の底に叩き落した小悪魔男、その人である。

「なんですか、その小悪魔男って」

「あら、湊君<sup>みなと</sup>。何の用？ 高校生はちゃんと高校に行かなきゃダメよ」

「今日は午後の授業がないんです。あ、こんにちは、リザさん」

「こんにちは、湊」

愛想良くリザにまで挨拶する湊君。

そう、この笑顔に私も騙されたのよ。

湊君とは、元々日本の学校で先輩後輩の仲だったんだけど、何の因果か一緒に留学することになってしまった。

お陰で私の心の傷は一向に癒されない。

「俺、春美さんを騙したりなんかしてませんよ」

「私を散々弄<sup>もてあそ</sup>んだ挙句に捨てて、乗り換えたじゃない」

「弄<sup>もてあそ</sup>んでません。捨ててません」

まあ、解釈の違いってやつね。

大学構内のカフェテリアでは、制服姿の湊君は目立つ。それが嫌なのか、湊君はちょっと肩をすぼめて私達のテーブルにいた。

「だから、何しに来たのよ？」

「昨日の夜中に『豚骨ラーメンの美味しいお店、探しといて』って電話してきたのは、どこの誰ですか」

湊君が、学校指定の鞆から紙を一枚取り出す。

「はい、これ。インターネットで調べときました」

そこには、豚骨ラーメン屋の名前と住所、地図が載っていた。

「そうだった！ありがとう、湊君！これで心置きなく死ねるわ！」

「は？」

「ううん、こっちの話」

私がいそいそと紙を折りたたんでいると、リザが湊君の脇をつついた。

「ねえ、湊。春美を説得してよ。」

今度の日曜、ジュークスのオーディションがあるんだけど、春美と一緒に受けに行きたいの。

それなのに春美、全然YESって言ってくれなくて」

「何のオーディションですか？」

「わかんない」

「・・・」

湊君が顔をしかめる。

ちなみに、3人の会話は全て英語だ。

「リザさん。春美さんみたいに無鉄砲な人を変なことに巻き込まないで下さい」

「リザ、私行くわ」

「え？ 本当！？ やった！」

「春美さん！」

リザと湊君が正反対の表情をする。

「春美さん、行かないって言ってたんじゃないんですか！？」

「言ってたけど。湊君が反対してるから、やっぱり行くことにするわ」

「・・・春美さん・・・そんなに俺のこと嫌いですか」

「嫌い」

「・・・」

私の心の傷は深いんだから！

湊君は「あーあ」と言って、大袈裟にため息をついた。

### 第3話 怪しいオーディション

ジュークスの会社は、THEマンモス企業！という感じの建物だった。

ソフトウェアの会社なら、ハードよりソフトで勝負しろって。

「社員が多いから、仕方ないんじゃない？」

そう言いつつ、リザも顔を真上に向けて、そびえ立つビルを眺めている。

口、開いてるわよ？

「ジュークスの本社で得体の知れないオーディション、か。

なんか、意味ありげじゃない？」

「どーでもいい。早く終わらせて、豚骨ラーメン食べに行こうよ、リザ」

湊君への反抗心から勢いでここへ来てしまったけど、私は早くも後悔していた。

せっかくの日曜なのに、何が悲しくて地下鉄を乗り継いでこんな都心まで出てこなきゃいけないんだ。

しかも平日なら賑わっているであろうストリートも、日曜は閑散としていてどのお店も開いてやしない。

電車賃、出してくれるんでしょうね。

「ケチよね、春美。この前のディカプリオのお釣りがあるじゃない」

「何言ってるのよ！」

「使ってないの？」



つ、使っていないわよ。

そりゃ、封筒に入れて大事に取ってはいないけどさ。  
お財布に入れてるから、お金そのものは使ってるけどさ。

再会できたら、ちゃんと通帳からおろして返すもん！

「ほんと〜に〜？」

リザが意地悪なイタチ目で私を見る。

「も、もしこのオーディションで合格したら、お金をもらえるかもしれないじゃない？

そしたら倍にして返すわよ」

言いながら、頭の中で電卓を叩く。

500ドルの倍って言ったら・・・げ。日本円で10万円くらいになっちゃうじゃん。

私は重ね重ね後悔しながら、リザと共にマンモスの胃袋へと飛び込んだ。

待合室代わりの大きな会議室に通され、私は目を丸くした。

中には50人ほどの女性がいて、揃いも揃ってみんな、黒髪のスートレートときている。

「日本人女性」のイメージを体現しているつもりなんだろうけど、みんな日本人か日系人なんだから、そんな無理して「日本人」しな

くていいのに。

絶対地毛は黒じゃないだろうに、染めて黒くしてる人までいる。

リザは私を見て肩をすくめた。

リザは元々黒い髪だけど、髪質が堅くごわごわしている。

それがまたリザの雰囲気に合わせていて良いのだけど、やっぱりこのオーデイション向きではないようだ。

一方、純日本人の私は「今時の日本の女の子」スタイル。

髪は染めた茶髪で毛先を緩くカールしている。

服装は襟が丸いお嬢様風ブラウスにハイウエストのミニスカート。もちろんヒールだ。

着物姿の人も居る中、浮きまくりである。

リザが部屋の中を見ながら、私に小声で話しかけた。

「私達、お呼びじゃないって感じね」

「そうね・・・でもほんと、何のオーディションなんだろ？」

「日本向けソフトフェアのパッケージ写真のモデル、とか」

「それならどっかのモデル事務所の日本人を使えばいいでしょ」

こんな口コミで一般人を集める必要がどこにあるのか。

実際、ここに集まっている人たちは、みんながみんな美人という訳ではない。

募集要項(?)は「日本人か日系人女性」だから、見た目は関係ないのかもしれない。

私達が部屋の入り口に突っ立っていると、

後ろで扉が開き、訛なまりのない綺麗な英語が聞こえてきた。

「お待たせ致しました。お集まり頂きありがとうございます。時間になりましたので、ただ今より5人1組で面接を行います。その後5人に絞り、その方々にはお1人ずつ再度面接を行います」

きちっとしたスーツ姿の女性が、一人一人に番号の付いた札を配り、手早くグループを分けていく。

なんか、採用面接みたいだ。

実は密かに、カメラテストがあったらどうしようと思っていたけど、心配は無用だったらしい。

私とリザは一つ目のグループで、他の3人とともに一列になって隣の部屋へ入った。

てっきり、いかにも面接官な人が何人も待ち構えていると思っていたら、

部屋の中にいたのは2人だけだった。

一人はこの場に相応しくないほど貫禄がある、重役タイプの男性。歳は50くらいだろうか。

白いものが混ざっている豊かな髪が、いかにも「お偉いさん」な雰囲気をかもし出しており、

三つ揃えのスーツがばっちり似合っている。

もう一人は秘書風の女性。

ナイスバディを余すところなく活かしている。

手にペンとノートを持っているところを見ると、書記役なのだろう。

つまり、私達に面接するのは重役風の男性一人ということか。

男性は「ようこそ」と言って私達に椅子を勧めると、名乗りもせず  
に早速、

名前、学歴・職歴、アメリカにいる理由・・・と言った履歴書レベ  
ルのことを、

ハリのある声で訊ねてきた。

ここは当然、5人とも難なくクリア。

しかし次に訊ねられたのは、家族のことだった。

それも家族構成だけではなく、親の職業や近親者に犯罪者がいるか  
なんてことまで聞かれた。

嘘をついたところでバレはしないだろうけど、

この男性には相手に嘘をつかせない威圧感のようなものがある。

幸い私もリザも特に困ることなくこの質問もクリア。

でも他の3人のうち一人は、兄が万引きで捕まったことがあると素  
直に打ち明けた。

その時私は、書記役の女性がノートに「×」を書いているのを見逃  
さなかった。

「さすが春美。残ったわね」

「嬉しくないけどね。なんかヤな感じだったし」

一気に人数の減った待合室で、私とりざは出されたコーヒーを飲んだ。

5人1組、計10組の面接が終わって発表された通過者の中に、私の名前もあったのだ。

残念ながらりざは落選。兄のことを正直に話した女の子も。

私以外の通過者は、モデル級のスタイルの人と、着物の人、OL風の眼鏡女性、

それに、アキバにいそうな不思議タイプ。

女子大生風の私（実際、女子大生だけど）を加えると、現代日本人女性の種類別図鑑の完成だ。

何を考えてるんだ、ジュークス。

ますます不安になりながら、

私は自分の名前が呼ばれるのを待った。

## 第4話 再会

今度こそ天国へ行くんだわ、と思えるほど、エレベーターは高く上っていった。

一体何階建てなんだろう、この建物。

いや、エレベーターのボタンは39階までなんだけど、案内役の女性が押したボタンは、「39」のボタンの上にある、カバーで隠された謎のボタンだった。

まさか本当に天国行きじゃあ・・・

ここへ来る前に豚骨ラーメンを食べとくんだったと後悔していると、エレベーターは音もなく止まった。

案内役の女性に促されてエレベーターを降り、分厚い絨毯に足を取られそうになりながら歩く。

「この部屋になります」

女性は、金のドアノブが付いた木製の重々しい扉の前で立ち止まった。

どうやらV・I・Pルームらしい。

思わず背筋を伸ばして3回ノックをする。すると中から「どうぞ」という声がした。聞き覚えのある声だ。

この声は・・・

「やあ、来たね」

部屋に入ってきた私を、先ほどより優しげな声で重役風の男性は迎えた。

重役「風」ではなく本当に重役らしい。

差し出された大きな右手に比べると、私の手なんか子供の手みたいだ。

それにしてもこの部屋は凄い。

家具類は全て木製の一流品。

それがシャンデリアの光を浴びて、艶やかに輝いている。

ちょっと不似合いだけど最新のデスクトップが3台も完備されているのは、

さすがソフトウェアの会社、といったところか。

物珍しげにキョロキョロしていると、

ようやく部屋の中に重役さん以外の人間がいることに気が付いた。

一人はソファに腰を下ろしている優雅なマダム。

この部屋の雰囲気にはピッタリだけど、ここがジュークスという会社の中だと考えると、

なんか場違いな感じがする。

そしてもう一人は・・・

「ディカプリオ！」

私は思わず叫んだ。

そう！私を病院に運んでくれた500ドルのディカプリオが机の脇に立っていたのだ！

幻かと思って目を擦ったけど、

ディカプリオは消えなかったし、狸にもならなかった。

こんなところで再会できるなんて・・・

運命としかいいようがない。

私は目をハートにしながら、

渋いスーツ姿のディカプリオを見つめた。

でも、ディカプリオは私を見ても眉一つ動かさない。

それに、なんだか冷たい目をしている。

前見た時は、腹痛で死にそうになっていたからはっきり覚えてないけど、

こんな目じゃなかった気がする。

もっと優しい目をしていた。

・・・本当に、あの時のディカプリオ？

そう思うと、なんだか別人みたいに見えてきた。

こんな目をした男の人が、見知らぬ人間を病院に運ぶとは思えない。

「ディカプリオ？なんのことだね？」

重役さんが首を傾げる。

「い、いえ！失礼しました！知り合いと似ていたもので・・・」



知り合いつて言うか、ディカプリオだけどね。

幸い重役さんは気を悪くした様子もなく、私にソファを勧めてくれた。

遠慮なく、マダムの向かいに座らせてもらう。

「おい、お前も座れ」

重役さんはディカプリオ・・・いや、ディカプリオもどき（なんかよく分からなくなってきた）にそう声をかけたけど、ディカプリオもどきは「ここでもいい」と言って動かなかった。

重役さんがため息をついて、マダムの横に腰を下ろす。

「私はルーク・コルテスだ。君はハルミ・サカガミだったね。

Ms. サカガミと呼べばいいかな？」

「いえ、ハルミで結構です」

ん？

ルーク・コルテス？

私は目の前の重役さんを改めて見た。

・・・どうして気付かなかったんだろう。

ニュースや新聞でしょっちゅう見る顔なのに。

「!!!! ジュークスの社長さん!!!!」

青くなる私とは対照的に、重役さんはニヤツと笑った。

「名前と顔だけで分かるなんてさすがだね、ハルミ」

「だって、テレビや新聞で・・・」

「私は経済関係のメディアにしか顔を出さない。

ゴシップばかり見ている若者は、私の名前も顔も知らないよ」

そうかもしれない。

ルーク・コルテスは自分を安売りするような人ではないから。

「日本の海光学園<sup>かいこう</sup>出身で、交換留学でアメリカに来て、現在はR大  
学の学生。

君は今日集まった女性の中ではずば抜けて優秀な経歴の持ち主だ」

「ありがとうございます」

私は素直にお礼を言った。

ここは謙遜が美とされる日本ではない。

ルーク・コルテスは、後の2人のことは敢えて紹介するつもりはな  
いらしい。

「ではハルミ。フリートークと行こうか」と言うと、いきなり日米  
経済について話し始めた。

むむむ。

さすがはルーク・コルテス。

話の内容はもちろん、話術も素晴らしい。

生来負けず嫌いでプライドの高い私は、  
知識を総動員してルーク・コルテスを迎え撃った。

「はあ！すっきりした！」

「便秘でも治りました？」

「バカ言わないで」

一応食べ物屋なんだから、遠慮すべき内容の会話だけど、日本語だからいいだろう。

あ、でも、日本人客が結構多いな・・・

豚骨ラーメン屋だからかな。

私は油とチャーシューを追加したラーメンと、にんにくたっぷりの餃子を、

かわるがわる口へ入れた。

香ばしい油の香りが口全体に広がる。

ああ・・・幸せ・・・

「熱い物の後は、冷たい物よね。後でどっかでアイス食べようよ」

「・・・どんだけ食べるんですか」

意外に小食な湊君は、何にも追加してない普通のラーメンの汁をレングで飲んだ。

「リザさんが急用で帰っちゃったからって、代わりに俺を呼び出さないで下さいよ。」

俺、結構忙しいんだから」

「だって、女の子一人でラーメン屋なんて入れないじゃない」

「春美さんなら入れると思いますけど」

「なんか言った？」

「いえ」

私は地獄耳なんだぞ。

アイスは奢らせよう。

「何も無理して今日ラーメン食べなくてもいいじゃないですか。

今度リザさんと一緒に来ればいいのに」

「今日はもう口もお腹もラーメンの気分になってたの！ラーメン以外はありえない！

それにもし明日死んだらどうするのよ！死んでも死に切れないわ！」

「全く、春美さんは・・・」

湊君が苦笑する。

湊君は海光時代から、私と比べ物にならないくらい頭が良かったけど、

アメリカに来てからはますます頑張っている。

今「結構忙しい」のも、高校卒業のための論文を書いているからだ。

だけど私が呼び出せば、文句を言いながらもこうやって必ず付き合ってくれる。

「姉には逆らえないわよねー」と私が言うといつも、

「妹の面倒見てるだけです」って反論されるけど。

「で、何がすっかりしたんですか？」

「それが聞いてよ！今日、例のオーディションへ行っただけど、なんとルーク・コルテス自ら面接してくれたの！」

「え？ルーク・コルテスって、ジュークスの社長の？」

「そうなの！しかも経済討論までしてきちゃった。

久々に思いつき頭をフル回転させて、すっきりしたわ」

湊君が箸を止め、目を輝かせる。

「ルーク・コルテスと討論！うわあ、いいなあ！俺もやってみたい  
！」

「でしょ！？面白かったわよ！」

普通の18歳と19歳の男女が喜ぶ話じゃない。

でも、湊君と私は所詮こういう男女なのだ。

まともな恋愛関係にならなかったのも、無理のないことかもしれない。  
い。

迷惑なことに私達は、その後2時間以上もラーメン屋に居座り、  
ルーク・コルテスの話で盛り上がった。

## 第5話 Coming Out!

「おめでとうございます、坂上様。見事オーディションに合格されましたので、

明日、弊社の受付までお越しください」

という電話がかかってきたのは、オーディションの2日後だった。

「合格」という言葉を聞いてなんとなく嬉しくなった私は、

「ありがとうございます!」とお礼まで言って電話を切ってしまった。

ただよく考えると、あれって何のオーディションだったんだっけ？

経歴みたいなことを話して、家族のことを話して、経済討論やって・

家族のことに關しては少し引かかるけど、普通に考えれば採用面接のように思える。

でも、今はそんな時期じゃないし、採用面接なら口コミなんかじゃなくて堂々と募集するはずだ。

それに日本人と日系人の女性限定というのもおかしい。

そういえば、経済討論を終えてルーク・コルテスの社長室から出ようとした時、

ルーク・コルテスの隣に座ってたマダムが突然、

「ハルミはお料理はできるかしら?」って聞いてきたっけ。

お湯を注いで3分待つくらいはできるから「はい」って答えちゃっ

たけど、  
よかったのかな。

まあ、とにかく合格したんだ。

ジュークスに行けば何のオーディションだったかも分かるだろう。

私は「もしかたルーク・コルテスと経済討論をすることになったら」  
と思い、

スーツをクローゼットの中から引っ張り出した。

ジュークスの受付で名前を言うと、  
面接の時に書記役をしていたナイスバディが30秒もしないうちに、  
私の所へやってきた。

どうやら受付近くのロビーで私を待っていたらしい。

「おはようございます、サカガミ様」

「は、はあ」

「社長がお待ちです。こちらへ」

面接の日のようにエレベーターに乗り、カバーで階層ボタンが隠さ  
れている階へと向かう。

だけど、なんか前とは違う。

なんか、妙に丁寧な扱いを受けている気がする。

ナイスバディの歩く速度とか、視線とか・・・

上手く言えないけど。

気のせいかな？

だけど違ったのはナイスバディの態度だけではなかった。  
社長室の中の雰囲気も違った。

置いてある物も、居る人間も面接の日と同じなのに、  
なんだか浮き足立った、というか、ソワソワしている、というか、  
そんな雰囲気だ。

唯一あの日と同じなのは、無表情なディカプリオもどき。  
何がそんなに面白くないのか。

「大学があるのに呼び出してすまないね、ハルミ」

ルーク・コルテスが愛想よくニコニコと私に椅子を勧める。

「いえ、それはいいんですけど・・・あの、私、本当に合格したんですか？」

「ああ。実は、最初に君を一目見た時からピンと来てたんだ。  
この子しかない！と思った」

「はあ」

・・・一目惚れされた気分だな・・・。

嬉しいような、嬉しくないような、どうせならもっと若い男がよかったような。

すると、幸い私の心の中の愚痴に気付かなかったマダムが（当然だけれど）、

輝かしい表情で大きく頷いた。



「私も。ハルミなら申し分ないわ」

「ど、どうも・・・」

だから、何に申し分ないの？

訳が分からず困っていると、

ルーク・コルテスがマダムの肩を抱いた。

「これは私の妻のジャンヌだ」

「は、はい」

「後ろに居るのが、息子のマクシミリアン。24歳だ」

ご丁寧に歳まで説明してくれたけど、

当のマクシミリアン・24歳は相変わらぬ無表情。

舌を噛みそうな名前だ。

ちゃんと発音できるかな？

ところが、

口の中で「マクシミリアン、マクシミリアン・・・」と復唱していると、

ルーク・コルテスが更に舌を噛みそうなことを言い出した。

「オーディションに見事合格したハルミには、是非、息子と結婚して欲しいんだ」

・・・は？

結婚？

m a r r i a g e っておっしゃいました、今？

部屋の中の時間が止まる。

いや、正確には止まってるのは私の時間だけのようだ。

ルーク・コルテスもジャンヌ・コルテスも、そしてマクシミリアン・コルテスも、  
表情を変えない。

時間が止まってしまつてポカーンとしている私に、  
ルーク・コルテスが同じ言葉を繰り返した。

「息子と結婚して欲しいんだ」

「け、結婚・・・？」

「そう、結婚。してくれるかね？」

ルーク・コルテスはいかにも大物らしく、  
事も無げにそう言った。

「後は若い2人で」、

というのは、日本に限ったことではないらしい。

私とマクシミリアン・コルテスは、コルテス夫妻に強引に押し出されるようにして、

会社の近くの広い公園を散歩していた。

どうしてこんな都心に、都合よく公園なんかあるんだ。  
さすが自由の国アメリカ。

関係ない？

それにしても・・・

私は少し距離を置いて横を歩くマクシミリアンをこっそり見上げた。  
本当に大きい。私と40センチ近く差がありそう。

当然歩幅も合わないから、一緒に歩くだけで一苦労だ。

「あ、あのー」

気まずい沈黙を打破すべく、私は勇気を振り絞ってマクシミリアン  
に声をかけた。

でも、2メートルはあろうかというマクシミリアンに私の声が届い  
たかどうかは定かではない。

だって、全然こっち見てくれないし。

気まずい・・・。

こういう時、どうすればいいの？

私は地面を睨みながら考えた。

小説とかだと、急に私達の前で子供が転んで、  
2人して子供に駆け寄り、思わず微笑み合う・・・みたいな？

あーりーえなーい！

そんな都合のいいこと、ある訳ないでしょっ！

が、現実には小説より奇なり。

もっと有り得ないことが起こった。

グルグルグル

私は真っ赤になってお腹を押さえた。

こ、こんな時に！！！！

さっき私が「あ、あのー」と言った声より遥かに大きいソレは、確実にマクシミリアンの耳に届いたらしい。

マクシミリアンが足を止めて、青い瞳を大きく見開き私を見る。

「あ、その、こ、これは・・・」

「まだ、お腹の調子良くないの？」

「・・・え？」

今度は私がマクシミリアンを見上げる。

青い瞳は、会社の中でのそれとは別人のように優しげになっていた。

「やっぱり！あの時のディカプリオだったんですね！」

私は、「ディカプリオ？」とキョトンとしているマクシミリアンを無視し、

一人で飛び跳ねて喜んだ。

やっぱりこれは運命の再会だったんだわ！  
しかも結婚だなんて！！

い、いや、何も結婚するって決めた訳じゃないわよ？

そりゃディカプリオ改めマクシミリアンにあの時一目惚れしちゃったけど、

こんな急に結婚となると、さすがの私も尻込みしてしまう。

でも、ディカプリオだし・・・

ジュークスの社長の息子だし・・・

それこそ、申し分ないんじゃない？

そうよ！

いよいよ私にも男運が巡ってきたのよ！

私はここぞとばかりに天使の微笑み（自称）をマクシミリアンに向けた。

「あの時はありがとうございました！もうお腹はすっかり大丈夫です！」

「そう、よかった。じゃあ、お腹がすいてるだけなんだね」

うっ。

「何か食べる？あ、だけど・・・」

マクシミリアンの瞳が急に暗くなり、無表情に戻る。  
今の状況を思い出したらしい。

そう。今はご飯より大事なことがある。

「さっきは父が突然失礼なことを言い出して、申し訳ない」

「いえ・・・あのオーデション、マクシミリアンさんの婚約者選  
びだったんですか？」

「そうなんだ」

それで、家族とかお料理のことを聞いたのね。  
通りでおいしいと思った。

マクシミリアンがため息をつく。

「父と母は僕が日本人好きだと思い込んでいて、こんなことを・・・  
。

迷惑をかけたね」

「そ、そんなこと！」

運命なんだから！

出合いがどうであれ、きっかけがどうであれ、  
きっと私たちはここから始まるのよ！

と、意気込んだものの・・・

だけどやっぱり現実には小説より奇なり、だった。

「大丈夫。僕と結婚なんかしくていいから」

「え。でも・・・」

「僕はハルミとも誰とも、結婚する気はないんだ。一生ね」

マクシミリアンは私から視線を外すと、遠くにある噴水を見つめた。  
思いつめたような目をしている。

そしてその大きな身体からは想像もつかないような小さな声で呟いた。

「僕はゲイなんだ」

## 第6話 頼まれ事

「春美さんて、ほんと、男運がないですね」

湊君が、「子犬みたいで可愛い！」とリザ絶賛のクリクリした目を少し見開いて、心底感心したように言った。

でも今の私には、あんたが言うか、と突っ込む気力もない。

「それでもケーキは食うんですね」

「ほっというて」

放課後。

大学のいつものカフェテリアで、リザに昨日のトンでもない話をしている、

またノコノコと湊君がやってきたのだ。

・・・まあ、私が以前湊君に頼んだレポートを持ってきてくれたんだけど。

リザがニヤニヤする。

「ジュークスの社長の息子がゲイ、ねえ。

しかも、それが前に春美が一目惚れしたディカプリオだとは！」

本物のディカプリオが聞いたら、気を悪くするだろう。

正確にはマクシミリアン・コルテスがゲイなのだ。

・・・はあ。



好きになった男の人に彼女がいたとしても、  
ううん、百歩譲って奥さんと子供がいたとしても、  
まだ立ち直ることはできる。

でも、一目惚れした人がゲイって・・・

さすが私。

もはや職人芸、

いや、職人ゲイ。

うまい！

・・・はあ。

「いいじゃん、春美。思い切って結婚したら？」

マクシミリアン・コルテスって一人っ子なんですよ？

将来、ジュークスの社長夫人じゃん！」

「リザ・・・他人事だと思って・・・」

リザなら怒ってくれると思ったのに、なんか楽しんでるし。  
が、思わぬ人物が怒り出した。

「でも、春美さんのことバカにしていますよね」

湊君が氷だけになったグラスをストローでかき回す。

「バカにしてる？」

「そうですよ。だって、コルテス夫妻は春美さんを、  
言われるがままゲイの息子と結婚してくれそうな女の人だと思った

訳でしょ？

オーディションとか言って・・・バカにしています！」  
「・・・」

何故か段々本気で声を荒げる湊君に、私とリザは顔を見合わせた。

確かに湊君の言う通りではあるけど、

私は余り「バカにされた」とは思っていない。

ゲイの息子の将来を心配し、早く結婚させたいというコルテス夫妻の親心は分からなくもないし、

（マクシミリアンにしてみればいい迷惑だろうけど）

何より、私のことを一応「コルテス家の嫁にしてもいい」と認めてくれたのだ。

そりゃあ、「じゃあ、結婚します！」とは言えないけど・・・

だから私は怒ってはいない。

ただ、悩んでいる。

1つは自分の男運の悪さに。

そしてもう1つは、昨日のカミングアウトの後に頼まれた事に関して・・・

私はコップの真ん中より下にあるカフェオレにシロップを追加しながら、

昨日のことを思い出した。

グルグルグル

衝撃のカミングアウトも空腹には勝てない。

気まずい沈黙を破ったのは、またもや私の見事な腹時計だった。

だけどマクシミリアンはそれをバカにすることなく、優しく微笑んだ。

「どこかお店に入ろうか?・・・君さえよければ」

マクシミリアンが最後に「君さえよければ」と付け足さなければ、いくら「コルテス家の息子となら、超リッチなランチがタダで食べれる!」という考えが頭をよぎろうとも、

私はマクシミリアンのお誘いを断っていただろう。

マクシミリアンは自分に引け目を感じている。

それが私に「はい」と言わせた。

そして20分後。

私は「はい」と言った自分に心の中で拍手喝采を送っていた。

「美味しい!!」

何これ!?

ただのサラダがどうしてこんなに美味しいの!?

私はフォークの先のトマトを、

まるで宝石でも見るような目で惚れ惚れと見つめた。

「気に入ってくれた？嬉しいよ」

普通の男の人がこんな台詞を言ったら、

「何気取ってんの？下心あるんでしょ？」と思ってしまいうけど、そこはゲイの強味(?)か、まるでいやらしく聞こえない。

いや。

というよりマクシミリアンから人の良さが溢れているからだろう。

「はい！すごく美味しいです！ありがとうございます、マクシシミリ・・・」

噛んだ。

目の前にいる人の名前を噛むなんて！

先ほどの腹時計に続く失態に、思わずテーブルに肘を付き、顔を片手で覆って首を振った。

「あはは、ハルミは日本人なのにリアクションがアメリカ人みたい  
に大袈裟だね」

「はあ・・・」

褒められてるのかけなされてるのか。

これまた悩ましい。

「僕のことはマックスでいいよ。親も普段はそう呼んでいる。

僕も・・・ハルでいいかな？『ミ』がつくと、ちよつと発音しにく  
いんだ」

「はい。どうぞ」

ハルでもナツでもアキでもフユでも好きに呼んで下さい。

ところがマックスは意外なことを言い出した。

「『美しい春』で『春美』か。綺麗な名前だよね。ハルにぴったりだ」

「・・・ありがとうございます」

こんな臭い台詞もマックスが言うとは嫌味がない。

それにしても、なんて日本的な感覚なんだろう。

マックスはもちろん英語を話しているけど、もしかしたら日本語も知っているのかもしれない。

そう言えばさっき「父と母は僕が日本人好きだと思い込んでいて」って言ってたっけ。

2人のサラダの皿が空になると、

湯気の立つスープが絶妙のタイミングで出てきた。

マックスが連れてきてくれた公園の脇にあるこのイタリアンレストランは、

こじんまりとしてるけど都心にありながら喧騒とは完全に切り離されていて、

どこか山奥のコテージにでも来たようだ。

上の淵が丸くなっている窓から差し込む陽の光が、料理の味を引き立てる。

でも、マックスはスープには手をつけずに改まって私に言った。

「実はハルに頼みがあるんだ」

「はい」

「今回の話は、ハルの方から断って欲しい」

「え？ 私から？」

マックスが軽く頷く。

「ゲイの僕から父と母に『結婚しない』と言っても、納得してくれないと思う。

でもハルが『私はゲイとなんて結婚できません。ゲイは女性と結婚すべきじゃありません』とはっきり言ってくれたら、父も母も、ハルのことだけじゃなく、これから先の僕の結婚も諦めると思うんだ」  
「そんな！」

そりゃ私は言いたいことズケズケ言うタイプだけど！

いくらなんでもそんな思ってもいないことを・・・

いや・・・どうだろう？

私、本当にそんなこと思ってない？

ゲイというのは、同性しか好きになれない男性のことだ。

そんな男性が女性と結婚しても、本人も相手も幸せにはなれないだろう。

それなら、例えば世間から冷たい目で見られようとも、好きな男性と一緒にいた方がマックスにとって幸せかもしれない。

それになんとかなくだけど、マックスには女性はもちろん男性の「恋人」もいない気がする。

世間体のためなのか、両親のためなのか、自分のためなのかは分からない。

でも、ずっとこのままなのは、マックスがかわいそうだ。

「・・・分かりました」

「ありがとう！嫌な役目を頼んでしまって、申し訳ない」

「いえ。こんな美味しいご飯が食べられたんですから、お礼をしないと」

私はちよつと無理して笑顔を作ると、

透明なスープを口に運んだ。

スープはもう冷めていて、何のスープなのかも分からなかった。

## 第7話 愛

「すげー・・・」

湊君が、いつかのリザのようにジュークスの本社ビルを見上げてため息をついた。

「こういうマンモス会社、好きなの？」

「いえ。正直に言うと、個人事務所っぽいところの方が好きです」

だよな。湊君で、そんな感じだもん。

湊君は視線を空から通常の高さへと戻した。

「でもやっぱり、将来のこととかを考えると、こういう会社がいいですね。

安定した生活を送れるし」

湊君らしからぬ台詞だ。

だけど、結婚願望が強い湊君は意外と安定志向だ。

その一方で、本当は会社経営に興味を持っているから、自分で起業とかしてみたいんだろうけど・・・

今の湊君には「結婚して家族を養う」ことの方が重要なのだ。

「春美さん。やっぱりコルテス家の御曹司と結婚して、俺をジュークスで雇ってくださいよ」

「あのね・・・どっちなのよ」



せつかく意を決して先日結婚の申し入れをお断りに来たのに！

湊君は「冗談ですよ」といつもの人懐っこい笑顔になったけど、目は笑っていない。

まだコルテス家の人々（小説のタイトルみたい・・・）が私をバカにしたと怒っているらしい。

でも、だからってどうしてついて来るわけ？

「春美さんだけじゃ心配ですから。目の前で金をチラつかせられたら『結婚します』とか言いそうで」

「・・・見くびらないでよね。第一、湊君と私の関係を聞かれたら、なんて答えたらいいのよ」

「ちよつとしたすれ違いで、お互いに片思いし合っていた仲」

私は分厚い英語の辞書が入った鞆で、思い切り湊君の頭を殴った。

湊君が間一髪でソレを避ける。

「首の骨が折れるじゃないですか！殺す気ですか！？」

「そんな正直に説明してどうするのよ！」

「じゃあ、弟ってことにしましょう。身内と一緒に断りに来たと知ったら、

さすがに向こうも手を引くでしょ」

それはそうかもしれない。

湊君は制服のネクタイをただすと、

「いきましよう」と言ってエントランスに向かって歩き出した。

社長室にはあの3人・・・社長のルーク・コルテスと妻のジャンヌ・コルテス、それに息子のマックスが私達を待っていた。ジャンヌは専業主婦なので普段は会社にいないはずだけど、今日は私が来ると知ってわざわざ出てきてくれたのだろう。それなのに、こんな話で申し訳ない。

挨拶を交わした後、ルーク・コルテスが湊君を見た。湊君は大物経営者を目の前にして一瞬目を輝かせたけど、今日の目的を思い出したのか、すぐに冷静な表情に戻る。

「ハルミ。そちらは？」

「私の弟です」

「面接で、ハルミは一人っ子だと言ってなかったかね？」  
「・・・弟分、です」

苦しい・・・

湊君がやれやれ、と言った感じで肩をすくめた。

「初めまして。坂上春美の従姉弟いとこの柵木湊ませぎみなとと申します」

うまい！

コルテス家の人々も納得したように頷く。  
特にルーク・コルテスは湊君に興味を持ったようだけど、

取り合えず今はそれは置いておくことにしたのか、早速本題に入  
った。

「それでハルミ、この前の話は考えてくれたね？」

「はい。・・・あの、そのことなんですが・・・」

アメリカ人ならここで躊躇わず「NO」を言い出すのだろう。

でも、日本生まれ日本育ちの日本人である私は、

まず「相手に失礼がないように」という考えが頭に浮かぶ。

マックスに言われたとおり「ゲイとは結婚できない。ゲイは女性と  
結婚すべきではない」とはっきり言おうと思ってたのに・・・

私が口ごもると、見かねたのかマックスが助け舟を出してくれた。

「父さん。ハルにはちゃんと本当のことを話した」

「・・・そうか」

「当たり前だろ？隠したまま結婚話を進めるなんてフェアじゃない」

今だ。

今、「やはり結婚の話はなかったことに」って言うんだ。

だいたい、私にはマックスと結婚する義理なんて全くない。

そりゃマックスに一目惚れはしたけど・・・

私は、父親にはっきりと自分の意見を言っているマックスを見た。

マックスは優しい人だけど、意志は強い。

だから親にもカミングアウトしたのだろう。

この数日、私なりに同性愛者のことを調べてみた。

といっても、同性愛者の人達が作っているホームページやブログを見ただけだけど、

その人達曰くカミングアウトの目的の一つは、

周りの目を気にして本当の自分を隠して生きる苦しみから脱却し、自分らしく堂々と生きる為らしい。

それなのにマックスは自分がゲイであることに引け目を感じ、恥じている。

恋人もいないようだ。

マックスは何のためにカミングアウトしたんだろう？

最初は強い意志を持ってカミングアウトしたけど、

親や世間からの非難に耐えられず、自分を押し殺すようになったんだらうか？

マックスは今まで、どんな思いで生きてきたんだらう。

そしてこれから、どんな思いで生きていくんだらう。

私は視線をマックスから、ルーク・コルテスが座っている椅子へ移した。

マックスもいずれここに座る日が来る。

でも、今のマックスに必要なのは社長の椅子じゃない。

今のマックスに必要なのは・・・

「私、マクシミリアンさんと結婚します」

「え？」と言ったのは誰だったか。  
でも発せられたのはその一言だけで、その後は沈黙が部屋を支配した。

それぞれが戸惑いの表情を浮かべる。  
結婚を言い出したコルテス夫妻でさえも。

私は真っ直ぐにマックスの目を見た。

「マクシミリアンさんが同性しか愛せないのは承知しています。  
でも、私はマクシミリアンさんの人柄が好きです。  
マクシミリアンさんが私のことを恋人として好きになれなくても、  
家族としての愛があれば、それでいいです」

そして私もマックスに家族としての愛をあげよう。  
孤独なマックスに。

## 第8話 構成要素

ジュークスの本社ビルを出たところで、私の手はようやく湊君から解放された。

「なんで結婚するなんて言うんですか!？」

湊君は本気で怒っている。

今までも、少々だらしない私のことを叱る意味で湊君が怒ることはあったけど、

こんな感情的な湊君は初めてだ。

「ボランティアで結婚することないですよ!」

「そういう言い方は、同性愛者の人に対して失礼じゃない?」

「春美さん!」

湊君がイライラと地面を蹴る。

「何考えてるんですか・・・あんな奴と結婚だなんて。

まさか、本当に金に目がくらんだんですか?」

「違うわ」

説明しても分かってもらえないだろう。

自分でも、よく分からないのだから。

マックスのことは好き。

でもそれは、一目惚れした時と同じ「好き」じゃない気がする。

どう違うのか。それが自分でも分からない。

「春美さん」

湊君がため息をつく。

呆れているのではなく、イライラを吐き出すようなため息だ。

「冷静になりましょう」

「私は冷静よ。湊君が勝手に怒ってるだけじゃない」

「春美さんも冷静じゃありませんよ。」

いいですか？同性愛者は文字通り同性しか愛せないんです。

もっとリアルに言うと、同性にしか性欲を感じないんです。

マックスと結婚しても、2人の間にセックスは存在しません。そんなの夫婦って言えますか？」

「・・・」

「そりゃ無理したらできるでしょう。でもそれは他でもないマックスにとって辛いことです。」

同性愛者にとって異性とのセックスは物凄く自尊心を傷つけられることだって聞いたことがあります。

同性愛者が異性を抱くのは、普通の人間が同性とセックスするようなものですよ？

春美さん、女とセックスしろって言われたら嫌でしょう？」

「・・・」

「お互い外に恋人を作って結婚生活が破綻するってのがオチですよ。まあセレブリティであるコルテス家の場合、取り合えずマックスが女と結婚して、

仮面夫婦でも結婚生活を続けることが大切なかもしれません。それは理解できます。でも、」

湊君の目が私を射る。

そこには怒りとも懇願とも取れるものがあつた。

「俺は、その『女』が春美さんだったのが認められない」

「私、早まったかな・・・」

マットレスの薄いベッドの上にゴロンと仰向けに転がり、少し薄汚れた白い天井を見つめながら一人呟く。ちよっと身体を動かすとスプリングが軋んだ。

日本でもずっと寮生活を送っていたし、

留学してからも先々月までは高校の寮に住んでいた。

だから大学生になってこのアパートメントで一人暮らしを始めた時は寂しくって、

しょっちゅうリザや湊君に電話してたっけ。

でも、考え事をするのには、この狭い一人部屋はピッタリだ。

「早まったかな・・・」

もう一度同じ独り言を言ってみる。

私はいい。

一瞬のうちの覚悟ではあったけど、マックスと結婚してもいいと心から思ったから。

そこには湊君の言っていた「セックス無しの夫婦生活」という覚悟もある程度含んでいる。



だけど、マックスはどうだろう？

マックスは、私と・・・女と結婚しても、辛いだけなんだろうか？

でもマックスは自分がゲイであることをカミングアウトしながら、ゲイとしての生活を送っていない。

それって、例えば見せかけだけでもノーマルとして生活していきたいって思ってるからじゃないの？

だったら、結婚していいって言ってる私なんて、うってつけじゃない。

それともマックスは、

結婚もせず、同性の恋人も作らずに一生一人でいるつもりなんだろうか・・・

そんなの寂しすぎる。

たまたま結婚せずに一生を終える人はたくさんいるけど、

自分の気持ちを押し殺し、若いうちから「一生一人でいる」って決めるなんて、辛すぎる。

さつき社長室で、コルテス夫妻は私の話を聞いて凄く喜んでくれた。「さすがハルミだ。私の目は確かだった！」と私の手を握ってくれた。

湊君は見なくても怒っているのが分かったから、敢えて湊君の方は見なかった。

そしてマックスは・・・

喜ぶでもなく、怒るでもなく、微妙な表情をしていた。

父親のルーク・コルテスに「ハルミとの結婚話を進めてもいいかな？」と訊ねられても、

曖昧に首を傾げるだけだった。

・・・迷惑だったのかな・・・

世間体だけでも保てるから、ちよつとは喜んでくれると思ったのに。

私は身体を横に向けて壁の方を向くと、  
息苦しさを感じたまま目を閉じた。

ピピピ・・・

遠くから携帯の音がする。

重苦しい気持ちのまま寝てたせいかな、  
嫌な夢を見て起きた時のように頭にモヤがかかっている。  
いや、正確にはモヤがかかっているのは私の心だ。

目を開けきれないまま手探りで携帯を探すと、

携帯は意外と近い場所・・・枕元に置いてあった。

この携帯を買った時から着信音を変えてないから、誰からの電話も全て同じ「ピピピ」という呼び出し音だ。昔は、グループ別に着歌とか設定して凝ってたのに・・・

だから、私の目を覚ましたのも「ピピピ」という音ではあったけど、ディスプレイを見る余裕もなく、どこの誰が電話してきたのかさっぱり分からないまま、

私は通話ボタンを押した。

「はひ・・・」

「ハル？寝てた？」

私は目を普段の1.5倍に見開き、思わずベッドの上で正座をした。

「マックス!？」

「今、いい？」

「うん・・・」

分かってる。

昼間のことよね？

あの時はコルテス夫妻は大喜びだったし、湊君は陰悪オーラ全開だったから、

2人だけで全然話してないもんね？

案の定、マックスは躊躇いがちに「今日の話のことなんだけど」と切り出した。

「ハル、本気？」

私はゴクツと唾を飲んだ。

マックスの気持ちは分からないけど、とにかく自分の思ってることは正直に言おうと思い、  
頭の中で必死にそれに相応しい英語を探す。

「冗談であんなこと言わないわ。

付け加えておくと、お金に目がくらんだ訳でも、ボランティアしてるわけでもないから」

「じゃあどうしてゲイの僕となんか結婚しようと思ったの？」

どうしてって？

私はマックスから見えるはずもないのに首を傾げた。

「分かんない」

「分からない？」

「うん。でも、もし今私がマックスと結婚しなかったらマックスは一生一人なんだろうなって思ったら、結婚しなきゃいけない気がしたの」

耳元で笑い声がした。

自嘲的でもなく私をバカにしている風でもない、  
自然な笑い声だ。

その笑い声が私の心のモヤをスーッと取り除いていった。

完全には取り除かれてはいない。

でも、漠然と感じていた不安や、マックスはどう思っているんだろうという心配が薄れていく。

そしてそれと同時に、よく分からなかった物の輪郭が少しずつ見えってきた。

「それに私、ゲイのマックスと結婚するわけじゃないわ。

私はマクシミリアン・コルテスという人間の全てと結婚するの」

「僕の全て？」

「うん。マックスがゲイだってことは、マックスを構成する要素の一つにしか過ぎない。

マックスは他にもたくさんの要素を持ってる。

優しさとか、おおらかさとか、意志の強さとか・・・

マックスは、全部ひっくるめてマックスなのよ」

「ハル・・・」

「私、そんなマックスと家族になりたいの。なれると思うの」

そう、私はマックスと家族になれる自信がある。

湊君の心配は分かる。

でも、マックスと私が絶対に幸せになれないとは限らない。

世間からどう見られようとも、

私達なりに幸せな家族の形を見つけられるかもしれない。

「ありがとう、ハル。嬉しいよ」

マックスがお世辞ではなくそう言う。

ううん、そもそもお世辞を言う人じゃないもんね。

分かってるよ。

「でも、少し考える時間をくれるかな？」

僕は今まで、自分は結婚なんてしないとずっと思っていたから・・・僕の方から頼むことじゃないけど」

「ううん。もちろんよ。私に人としての魅力を感じなかったら、遠慮なく振って」

「あはは、ハルは充分魅力的だよ。・・・本当にありがとう。また僕から連絡するよ」

「うん、待ってる」

私は携帯を切ると、

もう一度ベッドに寝転がった。

眠りはまたすぐにやって来た。

とても静かに、穏やかに。

## 第9話 もう1つの顔

「結婚話を断りに行ったはずが、何故か結婚するって啖<sup>たんか</sup>を切つて、でも本当にこれでよかったのかと思ひ悩みながら昼寝をしてたら彼から電話があつて、

話している内にスッキリして、結婚の決意を固めた、と」

「うん」

リザが両肘を机につき、両手の指をクロスさせてその上に顎を乗せる。

ついでに顔をしかめて長いため息をつけば、映画でよく見る「憂鬱な外人さん」のできあがりだ。

「ふざけてる場合じゃないでしょう。こういうことって普通は、滅茶苦茶悩んで、

『こうしよう!』って決めたり『でもやっぱり・・・』って尻込みしたりを繰り返して、ちよつとずつ前に進むもんじゃないの?」

「それ、やったよ?」

「1回だけでしょ」

ちなみに今は大学の講義中だ。

先生もちゃんと話している。

ただ私達がそれを聞いていないだけだ。

だってもう11月で、アメリカはすっかり冬の寒さ。

お陰で教室の中は暖房でぬくぬく。

そこに英語の授業とくれば、おしゃべりでもしてなきゃ寝てしまう。

「お互い悩みながらデートしたり、距離を置いたり・・・そういうのってない訳？」

「前デートしたし、今距離置いてるし」

リザの眉間の皺が濃くなる。

「だいたい、1話や2話で終わるような話じゃないでしょ。こういうところで引っ張らないと、

どこで引っ張るのよ。いくらテンポ命の小説でも、ぶっ飛び過ぎよ」  
「何、意味分かんないこと言ってるの。もう決めたんだもん、いいじゃない。後悔してないもん」

「・・・みたいね。ほんと、春美って一度こうと決めたら突っ走るタイプなんだから」

「うん。小学校の頃のあだ名は猪突猛進娘だったし」

「ちよとつ・・・？何、それ？」

「ジャパニーズなダディに教えてもらって。そうそう、それで結婚式の日取りなんだけど、」

「ちよとと待って」

リザが今度は人差し指で自分の眉間をグリグリと押した。

いろんなリアクション技を持ってるなあ。

今度使わせてもらおう。

「今、マックスが考え中で、春美はその答えを待ってるのよね？」

「うん」

「で、どうして結婚式の話が出てくるの？」

「だってコルテス夫妻はもう私達を結婚させる気満々で、さっきの昼休みにジャンヌが『結婚式、いつがいいかしら？』って電話してきたんだもん。



もちろんマックスが『結婚しない』って言えば私はやめるつもりだけど、

『結婚する』って言うてくれた時に備えて、準備だけはしとかなきゃ」

「準備、ね」

リザが、一重瞼という物の存在を忘れさせてくれるほどくつきりとした二重瞼の目で私を睨んだ時、  
タイミングよくチャイムが鳴った。

物理の法則からすれば、

「終わります」という教師の音が一番最初に聞こえるはずの一番前の生徒達が最初に席を立つはずだけど、教室というのは不思議な空間で、一番最後に教師の声が聞こえるはずの一番後ろの生徒達が最初に席を立つ。

だけど今日は素直に物理の法則に従って、

私は最後に席を立つことにした・・・っていうか、  
リザが私の腕をつかんでいて、立たせてくれない。

「何よ、リザ」

「どうせこの後暇なんですよ。ちよつと聞きなさい」  
「・・・」

何よ、説教？

でも、こればかりはいくらリザの意見でも聞き入れられない。

だってもう決めたんだから！

リザは鞆から何かの雑誌を取り出しながら、独り言のように呟いた。

「昨日の夜、湊から電話があったの。『春美さんを思い留まらせてください!』って。」

私、なんだかんだ言って、春美は湊とくつつくと思ってたのに」  
「・・・それはないわよ」

確かに、湊君が私を好きだったこともあったし、  
私が湊君を好きだったこともあった。

だけどそれはもう過去の話。

今は、私にも湊君にも「結婚したい人」がいる。

リザが机の上に雑誌を広げた。

経済誌だ。

でも、そのページは経済誌には相応しくない格好の女性が笑顔で写っていた。

「誰、このエプロン姿のオバサン？」

「春美・・・なんてこと言うのよ。そんなことじゃすぐに嫁・姑戦争が勃発するわよ」

「・・・げっ!」

私は思わず目を皿にして雑誌に見入った。

「これってジャンヌ!？」

「そう。ジャンヌ・コルテス」

マックスのママンじゃん!!!

や、やばい・・・

さっき、電話で話したところなのに・・・

だ、だって！

なんか雰囲気がいつもと全然違うんだもん！

「ジャンヌ・コルテスって有名な料理研究家なのよ。

料理教室なんかも開いてて、凄い人気なんだから」

「・・・」

「春美、オーディションの時、料理ができるかってジャンヌに聞かれて、

できるって答えたんでしょ？」

「・・・」

「目がウルウルしてるわよ。大丈夫？」

大丈夫じゃない！

忘れてた！

そうか・・・

あの質問は「マックスのためにお料理を作ってあげられるか？」って意味だったんだ！

「カップヌードルじゃ、ダメかな」

「ダメじゃない？」

「・・・だよね」

「春美がどうしてもマックスと結婚するっていうなら止めないけどね、

料理はできるようになっておいた方がいいよ。

ほら、ここに『家族の食事だけは使用人に任せず私が作っています』って書いてるし」

確かにそう書いてある。

なんてこったい。

食事もセブらしく使用人とかどっかのシェフに任せようよ。

私は雑誌を手に取り、悲愴な面持ちでそれを睨んだ。

でもいくら睨んでも「家族の食事だけは・・・」という文字は変わらない。

ああ。どうしよう。

なんとか誤魔化せないかな・・・

「でも、お嫁さんには料理は期待しないことにしてますの」なんて言葉が書いてないかと、

淡い期待を込めてページをめくると、そこにまた意外な顔が現れた。  
マックスだ。

見開きのページの4分の1くらいにマックスの写真が大きく載っていて、

ジュークスの経営方針についての話が書かれていた。

でも、このマックスも私の知ってるマックスじゃない。

私の知ってるマックスは、優しい穏やかな表情か、自分の感情を見せないための無表情だ。

この雑誌のマックスは、キリッとしたちょっと厳しい表情をしている。

いかにもデキるビジネスマンって感じだ。

・・・やっぱりかっこいいなあ。

「マックスってジュークスの専務なんだ。まだ24歳なのに・・・」  
「知らなかったの、春美？マクシミリアン・コルテスは学生時代から会社の仕事を手伝っていて、  
今じゃジュークスにもアメリカ経済にも欠かせない存在よ」

そう言えば、「マクシミリアン・コルテス」って名前は聞いたことがある。

「ルーク・コルテス」ほどではないけど、新聞やニュースでたまに出ってくる。

だけど、それがあのマックスだと思ったことがなかった。

マックスはご両親に心を開いているようには見えない。  
でも、ジュークスの仕事は頑張ってるんだ・・・。

私は何度もマックスの記事を読み返した。

## 第10話 料理教室

「イヤです」

「そこを何とか！」

「いくら春美さんの頼みでも、イヤなものはイヤです」

湊君がここまでキツパリと私の頼みを断るのは珍しい。  
でも、私も引き下がれない！

私はお辞儀して、頭の上でパンと手を合わせた。

「お願い！私を助けると思ってた！」

「春美さんを助けたいと思ってるから、イヤだって言ってるんです」  
「・・・」

湊君は入り口を塞ぐかのように、開いたドアにもたれて腕を組んでいる。

私を部屋の中に入れる気すらないらしい。

なんて強情な。

かくなる上は！

「いけ、リザ1号！」

「・・・2号はないけどね」

私の後ろで呆れ顔になるリザ。

それでも渋々湊君の説得に取り掛かってくれた。

「湊。私もずっと実家暮らしで料理なんてできないの。」

私の花嫁修業のためにも、協力してよ」

そうだ、そうだ！

が、リザがそう言っても湊君は折れない。

「リザさんの花嫁修業になら、幾らでも付き合いますよ。

春美さんのでもね。ただし、相手がマクシミリアン・コルテスじゃなければ、ですが」

「相手がマックスだろうとなかろうと、春美もいつかお嫁に行くのよ。多分ね」

多分、じゃない！

行って見せますとも！

「その時に春美が料理一つできず、恥をかくのは湊も嫌でしょ？」

「・・・」

「妹のために、一肌脱いであげてよ」

そうだ、そうだ！

・・・ん？妹？

ま、いっか。

さすがに、私に対するような不遜な態度をリザには取れないのか、湊君は渋々扉から背を浮かせると、何も言わずに部屋の中へ入って行った。

どうやら、ついて来いという意味らしい。

「やった！リザありがとう！」

私はリザの両手を握ってピョンピョンと跳ねた。  
リザが苦笑する。

「はいはい。でも、さっさとマスターしてよ？」  
「まかせて！ リングを切るくらいはできるわ！ 皮は剥けないけど」  
「・・・」

湊君の住んでいるこのアパートメントには扉が4つしかない。  
でも住んでる人はその3倍の12人。  
どういふことかというと、

ここは海外からの留学生同士でシェアする専用のアパートなのだ。  
1つの部屋に3人の外国人留学生が住んでいる。  
だから、4部屋×3人で12人。

ちなみに「1つの部屋」と言っても、本当に1つの部屋に3人が住んでいる訳ではない。

「1つの部屋」の中には、共有であるダイニングキッチン・リビング・トイレ・お風呂の他、  
個人用の小部屋が3つある。

高校の寮より安いし、色んな国の友達もできるし、生活力も身に付く、

という理由で、湊君は留学当初からここに住んでいる。

掃除や炊事も当番制できっちりやっているらしく、  
私も何度かここに遊びに来てるけど、なかなか居心地がいい。  
っていうか、私の部屋より綺麗だし。



「今日も綺麗に片付いてるわね」

私は、大きな目の4人掛けのテーブルが置かれている12畳ほどのダイニングキッチンを見渡した。

隣のリビングも合わせて、前来た時よりも片付いている。

「春美さんとリザさんが来るって言うから、掃除したんですよ。」

個人の部屋は俺のトコも含めてみんなぐちゃぐちゃです」

湊君は不機嫌な声と表情のまま、それでも冷蔵庫を開いてくれた。一般家庭用の大きな冷蔵庫だ。

対面型のキッチンも、充分すぎるくらい大きい。

「これは対面型じゃなくて、アイランド型のキッチンです」

「アイランド型？」

「コンロやシンクは壁沿いにあるでしょう？ダイニングに対面している台はフリースペースです。」

パンを捏ねたりするのに使えますよ。まあ、俺達はそんなことやりませんけどね」

なるほど。

ダイニングキッチンの真ん中辺りに、シンクのような台が独立してポンと置いてある。

でもシンクのように凹んではおらず、本当にただの台だ。

パンを捏ねるのにも良さそうだけど、さしあたりは配膳台と言ったところか。

「朝は皿をテーブルまで運ぶのが面倒なんで、

みんなでその台の周りで立ったまま食ったりします」

「テーブルと台の間なんて1メートルもないのに」

「その1メートルが死活問題なんですよ」

そんなことで死んでたまるか。

「炊飯器の準備はこれでよし、と」

湊君が炊飯器の予約ボタンを押して、満足そうに頷く。

「なるほど。おかずの前に、ご飯の準備をしなきゃダメなのね」

「そうです。3分クッキングとは違いますからね。

メインのおかずさえ作れば、ご飯と味噌汁が自動的に出てくるってことはありません」

ごもつともだ。

さすが、3日に1回、食事を作っているだけある。

ちなみに今日は湊君が夕食当番だからか、他の2人はまだ帰ってきていない。

「じゃあ今日は、春美さんのリクエストで肉じゃがにしましょう。

今時、肉じゃがで引かかる男はいないと思いますけどね」

「はい」

「まず、野菜を一口大に切りましょう。春美さん、肉じゃがの材料は？」

「えーと。お肉とじゃがいもと・・・人参！」

「そうです。後、玉ねぎとしらたき。きぬさやがあると、彩りが綺麗ですよ」

「はい、先生！」

私とりざが声を揃えて返事する。

なんか本当に3分クッキングみたいになってきた。

が、やっぱり現実は甘くない。

3分クッキングのアシスタントみたいに、「ちゃちゃっと野菜を一口大に切る」なんてこと、  
できる訳ない。

「春美さん。肩の力抜いて」

「う、うん」

手をプルプル震わせながら包丁でじゃがいもの皮を剥く・・・

って、難しい！

なんか、デコボコしてるし！！

「春美。無理せずピーラー使ったら？」

「嫌よ！そんな妥協したくない！」

最初から妥協組のりざが「ま、勝手にすれば？」と鼻を鳴らしながら、

ピーラーで優雅に人参の皮を剥いていく。

オレンジ色の薄くて長い皮が、憎らしい。

ごめんね、じゃが君。

君の皮と一緒に、随分実も削ってしまったよ。  
許しておくれ。

すると、私の手の中で、

「おいらの皮ももっと薄く剥いておくれよ！」と怒っているじゃが君が、

湊君によって救出された。

「時間がありませんからね。後は俺が剥きます」

「はい・・・」

「家で練習しといてください」

「はい・・・」

そしてわずか2分後。

綺麗に一口大に変身した野菜たちがまな板の上に並んだ。

「すごい、湊君！」

「野菜を切っただけじゃないですか・・・。さあ、味付けです。煮立っただし汁に硬い野菜から入れます」

「はい」

「じゃがいもは煮崩れるから、最後です」

「はい」

「それから調味料を『さしすせそ』の順番で入れます。

『さしすせそ』って知ってますよね？」

私とリザは顔を見合わせた。

「知ってる、春美？」

「ええっと・・・『さ』は砂糖、『し』は塩、『す』はお酢？かな？」

「『せ』と『そ』は？」

「うーん。分かんない。リザは？」

「分かるわけないでしょ・・・あ！でも、もしかして『そ』はソ

イソースじゃない!？」

「ソイソース? って、あ、醤油のことか! なるほど! そんな感じよね!」

じゃあ『せ』は・・・ゼラチン! とか」

「なるほど!」

きやあきやあ言ってる私とリザを無視し、  
湊君は鍋の中に人参と玉ねぎを放り込んだ。

## 第11話 ルームメイト

「美味しい！」

湊君のルームメイトである韓国人留学生のユンは、私（とりざと湊君。比率にして2…3…5）が作った肉じゃがを一口食べてそう言ってくれた。なんだか神様に見える。

「さすが湊。料理が上手だよな」

・・・一般人に格下げしてやろう。

湊君が一応フォローを入れてくれる。

「今日は、春美さんとトリザさんも一緒に作ったんだ」

「へえ」

「危うく、ぷるんぷるんの肉じゃがになるところだったけど」

・・・何よ。覚えたもん。

「さしすせそ」の「せ」は醤油で、「そ」は味噌なんですよ!?!  
なんか、反則って感じなんですけど!!

醤油なら「し」で味噌なら「み」じゃないの!?

私は湊君を無言で睨んだけど、

湊君はそれを見殺して、

「肉じゃがだけじゃなー」と言いながら余り物で手早く作った野菜炒めを箸でつまんだ。

くそう。主夫め。

「春美。湊が作ったお味噌汁を飲みながら睨んでも、迫力ないわよ」  
「ほっといて」

このお味噌汁がまた美味しい！  
くそう！！！！

とまあ、少々いざこざ(?)はあるものの、  
この部屋の住人3人に、私とりずの2人が加わった5人の食卓は穏やかで賑やかだった。

ただちよつと、私もりずもさつきから気になってることがある。  
だけど、なんとなくそれを聞き出しにくい雰囲気なのだ。

私はお味噌汁を飲みながら、こっそりと目だけ湊君の方へ向けた。

湊君の左隣には、ひよろつと背の高いユンが座っている。  
そして右隣には・・・何故か15, 6歳の日本人の女の子が座っている。

なんの為に着てるの?と言いたくなるほどフリッフリのミニワンピースに、編みこみブーツ。

それがまた白い肌と大きめカールの髪によく似合っている。

バッチリ姫メイクをしてるけど、多分そんなことしなくても充分可愛い顔をしてると思う。

まさにお姫様。

そう言えば数ヶ月前、湊君が、

「9月からルームメイトが1人入れ替わるんですけど、新入りは日本人らしいんですよ。

俺は他の国の人と友達になりたくてここに住んでるのに、日本人が来るなんて嫌だな！。

大家さんに頼んで、他の部屋も合わせてメンバー入れ替えしてもらおうかな」

と愚痴ってたのに、その数日後、湊君の態度はコロッと変わり、

「日本人を俺達の部屋で受け入れることにしました」と言い出した、なんてことがあった。

それってつまり、その新入りの日本人が可愛い女の子だったからって訳？

見損なったわよ、湊君！

あれ？

でも、どうしてこの部屋に女の子が住めるんだろう。

この部屋は男子専用でしょ？

まあ、人数とかの関係で、どうしても男女同室になったのかもしれない。

個人部屋があるから一緒に住めなくはないし、

お互いちゃんと「節度」を保てば・・・

しかーし！！

私はお行儀悪くずずーっと音を立ててお味噌汁をすすった。

お姫様の湊君を見る目が普通じゃない！

キラキラピカピカしてるわよ！

明らかに恋しちゃってるじゃん！



湊君も鈍い男じゃない。

お姫様の視線に気付いているはずだ。

こんな男女を一つ屋根の下に置いておくんて・・・言語道断!!!

それでも私は「野菜炒め、美味しいなあ」なんて思いながら自分の皿を全て綺麗に平らげ、デザートまでしっかり頂いて帰宅したのだった。

「この女ったらし!」

「そう来ると思ってました」

何の用なのか、またノコノコと大学のカフェテリアにやって来た湊君に、

私は開口一番そう言った。

が、湊君の横で物珍しそうにキョロキョロしているお姫様を見て、慌てて愛想笑いを作る。

「アラ、コンニチハ。・・・ユリア、ちゃん」

一瞬名前を忘れて焦ったけど、なんとか思い出した。

そうそう、「ユリアちゃん」だ。

昨日、純日本人なのに変わった名前だわ、と思ったんだった。

「あれ？春美さん一人ですか？リザさんは？」

「大学生だって暇じゃないのよ」

男の子にデートに誘われたんだとさー。  
けっ。

私なんて、婚約者（一方的に命名）から連絡もないってのに！

「そうですか。まあいいや、春美さんだけでも。・・・おい、座れよ」

湊君が私の向かいに座り、ユリアちゃんを見ながら自分の横の椅子を指差した。

ユリアちゃんはポツと頬を赤く染めると小さく頷き、素直にそれに従う。

「し、失礼します、春美さん」

「どーぞ、どーぞ」

いちいち可愛いな・・・

なんか、年取った気分だわ。

膨れっ面の私を見て、湊君がニヤニヤしながら訊ねてくる。

「肉じゃがの作り方覚えました？」

「なんとなく。練習しなきゃ。次は洋食を教えてね」

「ええ！？まだやるんですか！？勘弁して下さいよ。」

そうだ。ユリアと一緒にならいいですよ。

ユリアもまだあんまり料理できなくて、教えてやらなきゃって思ってたんです。いいですか？」

「・・・私はいいけど」

生徒に選択の権利はない。

湊君がユリアちゃんの方を見る。

「ユリアもそれでいいだろう？」

「はい！」

「よし、んじゃ次は春美さんとリザさんとユリアの3人だな」

「はい！」

・・・なんなんだろう、この2人。

私は得体の知れぬ違和感を覚えた。

湊君は、基本、女の子に優しい。

でも、昨日は会話が全て英語だったから気付かなかったけど、今日こうやって日本語で湊君とユリアちゃんが会話しているのを知ると・・・

確かに湊君とユリアちゃんは仲が良さそうだが、  
ただどそれでいて、湊君はユリアちゃんに対して随分サバサバしている。

それは、湊君がユリアちゃんの気持ちを迷惑に思ってるから、  
という訳でもない気がする。

とにかく、この2人はまだただの友達ってことだ。

私と湊君、

リザと湊君、のように。

だけどそれにしても・・・ちょっとサバサバしすぎじゃない？湊君。」

「じゃあ、今度は来週の土曜にしましょう。いいですか、春美さん」  
「あ。うん」

「洋食って言っても色々ありますけど、何にします？俺もそんなにレパートリーないですよ？」

「そうね・・・なんでもいいわ」

「ユリアは？なんか食いたいもんあるか？」

「ユリアは豚肉のしょうが焼きがいいです！」

湊君が声を上げて笑う。

「それって洋食かどうか微妙だな。ま、いいや。」

あ、そうだ、春美さん。今日は話があって来たんです」

「話？」

「俺がっていうか、ユリアが、ですけど」

「ユリアちゃんが？」

ビックリしてユリアちゃんの方を見ると、  
ユリアちゃんがちょっと赤くなって俯く。  
ついでにモジモジしだした。

むむむ。どうしてくれよう。

「あの・・・その、何て言ったらいいかわからないんですけど・・・」

「

「うん」

「お願い、があるんです」

「うん。なに？」

上目遣いの大きな瞳に私が映る。

「ユリアを春美さんの妹にしてください！」

はい？

## 第12話 Coming Out! 2

「ユリア、春美さんみたいに綺麗でかっこいい女性に憧れてるんです!」

「そ、そう・・・」

ユリアちゃんが勢い込んでテーブルに身を乗り出す。

「是非、春美さんの研究をさせてください!」

「ど、どうぞ・・・」

「いいんですか!? ありがとうございます!」

ユリアちゃんは今にも小躍りでもしだしそうな勢いだ。

って、研究ってなんだ。

解剖でもするのか。

あっけにとられて湊君の方を見ると、湊君が笑いを噛み殺している。

「昨日の夜、春美さんが帰った後急に『春美さんみたいになりたいです!』って言い出したんです」

「・・・」

「俺は賛成しませんけどねー。春美さんが2人もいたら大変です」

どういう意味よ。

でも、大喜びしているユリアちゃんを見ているうちに、  
私はいいいことを思いついた。

正直言って、私はユリアちゃんを湊君に近づけたくない。

ユリアちゃんだけじゃない。

女の子なら誰でも湊君に近づけたくない。

・・・別に、湊君を独占しようとは思ってる訳じゃないわよ？

とにかく、これを上手く利用すれば・・・

私はわざとらしく咳払いをした。

「ねえ、ユリアちゃん。ユリアちゃんて、湊君と同じ高校に通ってるの？」

「え？まさか！ユリア、湊さんみたいに頭良くないです！U高校に通っています」

そう言えば、湊君はブレザーの制服を着てるけど、

ユリアちゃんは昨日みたいなお姫様ワンピースだ。

でも、U高校と言えば、湊君が通っている（そして私が通っていた）

L高校ほどではないものの、

結構なレベルの高校だ。

加えてセレブのお子様方御用達。

どうやらこのお姫様は本当にお姫様らしい。

「U高校ならこの近くね」

「はい」

「だったらさ、うちのアパートに引っ越してこない？」

「え！？」

ユリアちゃんが、大きな目を更に大きくする。

ついでに湊君も笑顔のまま顔を固めてポカンと口を開けた。

「私が住んでる部屋の隣が空いてるの。

U高校からも近いし、治安もいい場所だし」

あなたの憧れの春美さんも隣に住んでるし。

「どうかな？」

「え？ ええ？ ど、どうしようかな・・・」

動揺するユリアちゃん。

でも、私の提案にかなり心は傾いているようだ。

「どう思います、湊さん？」

「そりゃユリアの勝手だけど・・・いや、やっぱダメだ」

湊君はちよつと戸惑った様子だったけど、キツパリと言い切った。

「ユリアがうちの部屋に来ることになった時、ユリアのご両親に、『くれぐれもよろしく』って頼まれてるし、第一春美さんだって結婚するかもしれないんでしょ？」

「あ」

「ま、しなくていいですけど」

そうだった！ 私、結婚するかもしれないんだった！

もし結婚したら、今のアパートは出て行くことになるわよね？

じゃあユリアちゃんが引っ越してきたとしても、意味ないじゃん。

「春美さん、結婚するんですか!？」

何も事情を知らないユリアちゃんが、目を丸くする。



「あー、うん、まだ決まっていけないけど、もしかしたらするかも」  
「すごい！それでこそ春美さん！さすがです！」

そう？

「そっかー・・・でも、残念です。」

春美さんの近くで春美さんを研究させてもらいたかったのに」

「そうね・・・」

本気でガッカリするユリアちゃん。

そんなユリアちゃんを見てたら、なんだか私まで残念な気がしてきた。

湊君を慕っているという一点を除けば、ユリアちゃんには文句をつけるところがない。

そしてそれが嫌味でもなく、好感を持てる。

見た目はちょっとイッチャってるけど、中身はしっかりしてるし、何より、なんだか私とフィーリングが合う気がする。

「・・・うちに来る？」

「え？」

「私の部屋、サービスルームがあるんだけど、使っていないの。  
結婚するかどうかはまだ分からないけど、もし結婚するならそれまでだけでも・・・」

ユリアちゃんがパツと顔を上げる。

花でも飛んできそうな表情だ。

「いいんですか!？」

「うん」

サービスルームと言っても、日本のそのようにベッドを置いたらいっぱい、という訳じゃない。

私が今使っている1LDKとは扉でちゃんと区切られているし、お互いプライベートは確保できる。

それに私は、高校時代は日本でもアメリカでもずっと寮生活だったから、

区切りも何もない一つの部屋の中で他の生徒と暮らしていた。

そのことを思えば、ユリアちゃんとの同居なんてなんでもない。

「もちろん、ユリアちゃんが良ければだけど」

「良いです!」

「ちょっとした間かもしれないから、ちゃんとした引っ越しはせずに、ご両親には今のまま湊君たちのアパートに住んでることにしておけばいいわ。

うちなら家賃もいらないからご両親にバレることもないでしょ。

もし結婚の話が流れたら、またその時考えよう」

「はい!ありがとうございます!」

「ちよっと待ってください!」

ようやく湊君が口を挟む。

「ダメですよ、同居なんて!」

「どうして?」

「だって春美さん、ユリアのことなんてロクに知りもしないじゃないですか!」

「私は知らないけど、湊君は知ってるでしょ?」

どう?ユリアちゃんは、とてもじゃないけど一緒に住めないような

子？」

「い、いや、そんなことないですけど」

「でしょ？それにU高校の生徒なら身元も確かだし、問題無いわよ」

「・・・」

湊君も、私が言い出したなら聞かない猪突猛進娘（多分ユリアちゃんも）だと知っているの、

それ以上反対はしない・・・と思ったら。

いい感じに話がまとまってきた最後の最後で超ド級の爆弾を投げてきた。

「やっぱダメです」

「なんでよ」

「ユリアはレディボーイだからです」

「レディボーイ？」

ユリアちゃんを見ると、

ユリアちゃんは「てへっ」と言う感じで可愛らしく舌を出して笑った。

「何よ、レディボーイって」

「レディの心を持つボーイってことです」

「レディの心を持つボーイ・・・って、つまり、ボーイってこと？」

「そうです。ユリアは男です」

「・・・」

もう一度ユリアちゃんを見る。

ユリアちゃんはまだ舌を出して笑ってる。

レディー・・・「ボーイ」。

オーマイガー！

### 第13話 引っ越し

「なんとかして」

「もう手遅れです。春美さんが言い出したことなんだから、自分で責任取ってください」

荷物をまとめてきます！と、

凄い勢いでカフェテリアを飛び出して行ったレディボーイの背中を見送った後、

（というか、呆然と見ていただけたけど）

私と湊君はユリアちゃんを追いかけるべく、湊君のアパートへ向かっていた。

でも、湊君だけでなく私も「手遅れ」だと感じているので、歩くペースはのんびりだ。

それでも一応文句は言ってみる。  
文句くらい言わせてくれ！

「ユリアちゃんがレディボーイだなんて聞いてないし」

「俺もすっかり忘れてました。どう見ても女ですからねー」

でも多分湊君は、頭のどこかでユリアちゃんは男だという意識があるから、

ユリアちゃんに対して無意識にサバサバした態度を取っているのだろう。

男友達にそうするように。

「第一、ユリアって女みたいな名前はなんなの？本名？」

「まさか。本名は拳四郎けんしろうです」

「けん・・・」

「お父さんが『北斗の拳』の大ファンで、息子に拳四郎って名付けたそうなんですけど、

父の勧めで『北斗の拳』を読んだ息子の拳四郎は、何故かヒロインのユリアに憧れてしまい、

自分のことをユリアと名乗るようになりました。ちゃんちゃん」

ちゃんちゃん、じゃなーい！

ていうか、不憫だな、ユリア父。

まさか拳四郎がユリアになろうとは、夢にも思ってたんだろう・・・。

「でも、日本じゃまだレディボーイに対する風当たりは強いですからね。

ユリアのお父さんはそれを心配して、ユリアをこっちに留学させたんです。

ついでにユリアを拳四郎に戻せたらと、ユリアを男子校のU高校に入学させたんです」

そうだった！U高校って男子高じゃん！！

やられたーっ！！！！

「それで住むところも男とルームシェアできる湊君とこのアパートになったって訳？」

「そうです。俺は最初、日本人と同室になるって聞いて気が進まなかったんですけど、

そういう事情なら、いきなり外人の男ばかりの部屋に入れられるのもかわいそうだなと思って」

「なるほど。でもユリアちゃん、湊君に惚れてるみたいじゃない。湊君で、美少女にモテるよね」

湊君の眉間にキュツと皺が寄る。

この目もりザ曰く「かわいい」らしい。

「・・・春美さんがそれを言いますか」

「貞操の危機はないの？」

「ありません。ユリアが俺を好いているのはブラコンみたいなもんですよ。」

ただ、ユリアの心は完全に女です。俺は無理して男に戻すことないと思ってます。

ユリアはユリアらしく生きていけばいいんですよ、その方がユリアにとって幸せです」

「ふーん。随分とレディボーイに対して理解があるのね。同性愛者にはないのに」

「・・・」

とたんに湊君が口を噤む。

意地悪なことを言っちゃったかな。

でも私も、身体が男でも心が女なら、ユリアちゃんは「女」だと思う。

だったら一緒に住んでも全然問題ないよね？

ユリアちゃんもそうしたいって思ってくれてるし。

「・・・俺は別に、同性愛者に理解がない訳じゃないし、軽蔑してる訳でもありません」

「ふーん」

「でもやっぱり、春美さんがゲイと結婚するっていうのは納得でき

ません」

「それってつまり、自分と関係ないところにいる同性愛者は許せるけど、

自分の近くにいる同性愛者は許せないってこと？ありがちよね」

思わず口調が強くなる。

湊君を責めるつもりはないし、

マックスと知り合わなければ私も湊君と同じ考え方だっただろう。

でも、マックスは「同性愛者だ」と一括りにできる人じゃない。

ううん、誰だってそうだ。

一言でその人の全てを表すことなんて、できるはずがない。

結婚において、同性愛者かそうでないかはとても重要なことだろうけど……

マックスがもし同性愛者でなければ、

マックスは今のマックスではなかっただろう。

私も好きにならなかったかもしれない。

好き？

好きっていうか……うーん、なんて表現すればいいんだろう、この気持ち。

ただマックスと一緒にいたい、一緒にいてあげたい。

そんな気持ち。

私と湊君はそれぞれ違うことを考えて黙ったまま、

湊君のアパートまで歩いた。



「このボレロ、超かわいい！」

「でしょー！？表参道のショップで見つけたんです！」

「表参道のショップ？やっぱユリアちゃんはお嬢様ねー」

私に悩む時間も与えず、ユリアちゃんはその日のうちに私の部屋へプチ引っ越ししてきた。

で、ユリアちゃんの鞆の中の物を、クローゼットにしまうのを手伝ってただけど、

「掃除中に昔のアルバムを見つけちゃいました」的雰囲気で、はかどらないはかどらない。

ちょっとかわいい服とか小物を見つけては大騒ぎだ。

「この帽子もかわいい！」

「それはこっちのアウトレットで買ったんです」

「アウトレット！？車で行ったのよね？電車じゃいけないもんね？」

「はい。高校の先輩で車持ってる人がいて」

「いいなあ」

「春美さんも今度一緒に行きます？」

「うん！あ、足りない物があったら、取り合えず私の貸してあげるから言ってね。」

日用品でも服でも靴でも・・・って、服はこんなに持ってたなら、貸す必要ないか」

ユリアちゃんはスーツケースと大きなボストンバックを一つずつ持

ってきたけど、  
その中はほとんど服と靴と化粧品だ。

うーん、天晴れな女心。

「ありがとうございます！春美さんも、ユリアの物、何でも・・・」  
と、ユリアちゃんが突然言葉を切って涙ぐんだ。

「ど、どうしたのよ、急に？」

「すみません・・・嬉しくって」

「嬉しい？」

「はい」

ユリアちゃんは目に涙を湛えたまま微笑んだ。  
思わず抱き締めたくなるほどいじらしい笑顔だ。

「ユリアは一人っ子だから、こういう姉妹みたいな会話にずっと慣れてたんです。

でも女の子達はユリアのことを女の子として見てくれなかったし、男の子達は気持ち悪がるだけだったし・・・。

ユリアにこんなに普通に接してくれたのは、湊さんとユンさんと春美さんが初めてです。

嫌々だったけどアメリカに来て、本当によかった」

「・・・」

忘れてた、ユリアちゃんは男の子だったんだ。

だって、湊君も言ってたけど、ユリアちゃんの心は本当に女の子だ。ユリアちゃんはたまたま見た目もかわいいけど、

もし見た目がイカツイ男の子でも、ここまで心が女の子なら、

私はユリアちゃんが男の子だということを忘れてしまうだろう。

ユリアちゃんはちよつと照れくさそうに言った。

「でも実は、あのアパートはちよつと居心地が悪かったんです」

「どうして？」

「変に思うかもしれませんが、ユリア、男の人に裸を見られるのが嫌なんです。

男の人の裸を見るのも。身体は同じなのに・・・変ですよね」

「・・・」

「湊さんとユンさんも気をつけてくれましたけど、きつとちよつと気疲れしてたと思うんです。

ユリアも、2人にそんな気を使わせてしまつて申し訳なく思つてました。

あ、でも、ここでも一緒ですよね・・・ユリアは春美さんに裸を見られても平気ですけど、

春美さんは見るのも見られるのも嫌ですよね・・・ごめんなさい」

私は笑つた。

ユリアちゃんにとっては真剣な悩みだから笑っちゃいけないかもしれないけど、

思わず笑つてしまった。

「私はユリアちゃんに裸を見られても平気。だってユリアちゃんは女の子だもん」

「春美さん・・・」

「だけどやっぱり、ユリアちゃんの裸を見るのは困っちゃうかな。

目のやり場に」

「ふふ、そうですね。それだけは気をつけます」

それから私達は賑やかにおしゃべりをしながら、  
2時間以上かけてユリアちゃんの荷物を片付けたのだった。

## 第14話 違い

ユリアちゃんは右手右足を揃えて歩いた。  
目は好奇心でキラキラし、頬は上気している。

「何をそんなに緊張してるのよ？」

「だって！お姉様のフィアンセに会うんですよ！緊張しますよ！」  
「・・・」

フィアンセ、ね。

私は木枯らしの吹く夜道を急ぎながら、苦笑いした。

12月に入ったばかりの昨日、

ようやくマックスから連絡が来た。

だけど開口一番、マックスは「ごめん」と謝った。

私はてっきり「やっぱり結婚はできない」と言われるのだと覚悟したけど、そうじゃなかった。

「申し訳ないんだけど、まだ決めかねてるんだ。優柔不断で本当にごめん」

「優柔不断だなんて、そんな・・・」

結婚するかしないかなんて、誰にとっても大きな決断だ。  
マックスにとってはアイデンティティの問題でもある。  
迷って当然だ。

「それで、一度食事でもどうかな」

「私のことを知るために？」

「それもあるけど、

母が『いつまでハルミを放っておくつもり！？逃げちゃうわよ』ってうるさいんだ」

「ええ？あはは」

正直だなあ、マックス。

日本人の男の人は、母親にそんなことを言われただなんて隠しこそすれ、

口が裂けても言わないのに。

私がベッドの上で携帯片手に笑い転げていると、突然部屋の扉が開いた。

私の部屋と隣のサービスルームの間にある扉だ。

そこから顔を出したのはもちろんユリアちゃん。

って、どうしてそんなに鼻の穴を膨らませてるわけ？

『お姉様！ユリアも行きます！』

ユリアちゃんが口パクで話す。

ちなみにここに住み始めてから、ユリアちゃんは何故か私を「お姉様」と呼んでいる。

・・・恥ずかしいんですけど。

『はい？』

『その電話、お姉様のフィアンセからですよね！？』

『うん』

『やっぱり！ユリアも行きます！』

『・・・』

ユリアちゃんも、どっかの誰かと似ていて言い出したら聞かない。  
私は仕方なくマックスにお願いすることにした。

「妹も連れて行っていいかな？」

「妹？ハルは一人っ子でしょ？」

「妹・・・分」

「あははは、ハルの周りには弟分やら妹分やら、色々いるね」

正確にはコレも弟分ですけどね。

まあ、電話でそこまで説明する必要はないだろう。

マックスは予想通り快く「もちろんいいよ」と言ってくれた。

と、いう訳で、今日こうしてユリアちゃんと一緒に、  
マックスと待ち合わせしたレストランへと向かっているのだ。

「お姉様。ちょっと聞いてもいいですか？」

ユリアちゃんが白い息を吐きながら言った。

「どうして湊さんはお姉様のフィアンセのことを嫌ってるんですか」

「ああ、聞いてないんだ？マックスはゲイなの」

「ゲ、ゲイ！？」

ユリアちゃんが立ち止まって目と口を同時に開く。  
レディボーイにそこまで驚かれるとは心外だ。

「ええ！？どうしてゲイと結婚するんですか！？」

「好きだから」

「そ、そうですか・・・」

そう言いつつ、ユリアちゃん目はまだ元の大きさに戻らない。

「・・・驚きました」

「それが狙い」

私がおどけてそう言うのと、ようやくユリアちゃんは笑った。

「さすがお姉様です！」

「でしょ？・・・ねえ、私も一つ聞いていい？」

「はい」

「レディボーイとゲイは違うの？」

ユリアちゃんがキョトンとした。

ユリアちゃんと暮らし始めて1週間。

最初から忘れてたけど、私はユリアちゃんが男の子だということをすっかり忘れていた。

だってユリアちゃんとの生活は完全に女の子同士の生活だ。

何の気遣いも必要ない。

さすがに私は部屋の中を裸でウロウロすることはないけど、それは本物の女の子と暮らしても同じだもんね。

だけど、私が何の気遣いもしなくていいのは、

ユリアちゃんがさりげなくそれなりに気を遣ってくれているからだろう。

ユリアちゃんに私の家に住むよう勧めたのは、



元はと言えばユリアちゃんを湊君から引き離すためだったけど、  
（ユリアちゃんは男の子なんだから、そんな必要なかったんだけど）  
今となっては、私は純粋にこの生活を楽しんでいる。

そしてそれは、時々私を懐かしい気分させるものでもある。

日本で海光中学・高校に通っていた頃、

私は同じ先輩とずっと同室で寮生活を送っていた。

その先輩はユリアちゃんとは全然タイプが違って、

真面目で学校一の秀才で、お洒落や恋愛なんか全然興味の無い人だった。

でも、何故か私とその先輩は気が合って、よく夜遅くまでおしゃべりしてたっけ。

ユリアちゃんと一緒にいると、ふと当時のことを思い出す。

だけどユリアちゃんとのガールズトークの内容はもっぱら洋服と男の子のこと。

そして「男の子のこと」というのは90%が湊君のことだ。

そりゃそうよね。

ユリアちゃんは現在進行形で湊君に恋してるし、

私も過去形で恋してたし。

湊君の話題で盛り上がらない訳が無い。

「レディボーイとゲイの違いですか・・・」

ユリアちゃんがしたり顔で腕を組む。

「レディボーイは自分を女の子だと思ってるから当然男の子を好きになる、

ゲイは自分のことを男だと自覚している上で、男の子を好きになる、ってところですかね。

でも、身体の性別だけで考えると、

レディボーイもゲイも男が男を好きになるって言う意味では一緒なのかな」

「うーん。難しいね」

信号に引っかけり、私は雪が降りそうな灰色の空を見上げながら唸った。

「でもユリアは基本的に男の子が怖いです。

乱暴だし冷たいし、ユリアのこと軽蔑するし。

湊さんのことは好きですけど、男の子として好きっていうより、お兄さんみたいな感じ・・・テレビの中のアイドルに向かってキヤーキヤー言ってる感じです」

それは、この1週間ユリアちゃんを見てきて私もそう思った。

ユリアちゃんは湊君に恋してるけど、

それはアイドルに対する憧れみたいなもんだ。

本気の恋愛じゃない。

だから湊君も悠々と構えてられるのだろう。

でももしユリアちゃんが誰か男の子に本気で恋したら、

ユリアちゃんもマックスのように苦しむのだろうか。

そんなユリアちゃん、かわいそうで見られない。

横断歩道を渡り、住宅街の中を少し歩いたところでユリアちゃんが足を止めた。

「あ。もしかして、あの人ですか？」

見ると、洒落たバルコニーが目立つ白いレストランの前にマックスが立っていた。

マックスも私達に気づき、笑顔になる。

・・・久しぶりのマックスだ。

私はなんだかホッとした。

ドキドキはしない。

ただホッとして、顔が勝手に綻ぶ。

なんなんだろう、このあったかい感じは。

私は歩調を緩めた。

「こんばんは、マックス」

「こんばんは。ずっと連絡もしなくて悪かったね」

「ううん！私、お腹すいちゃった！」

「ハルはいつもお腹をすかしてるね。子供みたいだ」

マックスはそう言ってまた笑った。

その笑顔こそ、まさに子供のように無邪気なものだった。



## 第15話 ヤキモチ？

一見、彼氏と彼女とその妹。

でもその実、ゲイとその婚約者候補とレディーボーイ・・・  
という妙な取り合わせの3人は、

それでも和やかなムードで食事をした。

会話の内容は専らジュークスのこと。

私とユリアちゃんが聞きたがったからなんだけど、  
マックスはちゃんと食事の席に似つかわしいレベルで、且つ、  
大学生になったばかりの私と高校1年生のユリアちゃんが理解できるレベルで、

ジュークスのことを色々教えてくれた。

が、最後のコーヒーと小菓子の段階になって、  
マックスが思わぬ話題を振ってきた。

「ミナト・マセギは元気？」

「え？ 湊君？」

確かに私が2回目にジュークスへ行った時、

（結婚話を断るつもりで行ったのに、「結婚します」と言っちゃった時だ）

私の従姉弟ってことで湊君もマックスと会ってるけど、  
マックスと湊君は特に会話をしてなかったと思う。

それどころか湊君はずっとマックスを睨んでいたから、  
マックスも湊君が自分を良く思っていないことは気付いてるはずだ。

それなのにマックスはどうして湊君のことを聞くんだろうか？  
単なる世間話だろうか。

「うん。元気よ」

私は取り合えず無難な返事をすることにした。  
でも、マックスはやたらと湊君の話題に食いつく。

「ミナトは高校生だよね？どこの高校？」

「私と一緒に。L高校よ」

「今何年生？」

「3年生」

「卒業後は日本に帰るのかな？」

「今のところはそのつもりみたい。日本の大学を受験するかもって  
言ってたわ」

どうしてそんなに湊君のことを聞きたがるんだろう。

湊君に興味を持ったのかな。

・・・ちょっと待って。

マックスの場合の「興味」って・・・。

私はコーヒーをゴクツと飲み、  
その苦さに目を白黒させた。

「湊さんのこと、気になるんですか？」

ユリアちゃんが笑顔で事も無げにマックスに訊ねる。

まるでマックスがゲイだなんてことは知らずに、純粹に質問してる  
だけに聞こえるけど、

ユリアちゃんもなかなかの曲者。

そう見せかけているだけで、実は私と同じことを考えているようだ。

でもマックスはユリアちゃんより、そして私より、1枚も2枚もウワテだった。

「僕のコト、知ってるみたいだね。でも心配しなくいいよ。ミナトは僕のタイプじゃない」

喜んでいいのか、悪いのか。

湊君はこれを聞いたらホッとするだろうけど。

「ユリアもミナトと同じL高校なの？」

「いいえ。U高校です」

マックスのコーヒークップを持つ手が止まった。

「U高校って男子校じゃなかったっけ？」

「はい。ユリアはレディボーイなんです」

これまた事も無げに言うユリアちゃん。

マックスが驚いて目を見開く。

そりゃ驚くよね。

マックスにはユリアちゃんのことをレディボーイだと教えていなかった。

でもそれは隠していた訳ではなく、敢えて教える必要がないと思ったからだ。

ところが。

「でもユリアはハルと一緒に暮らしてるんだよね？」

珍しくマックスの口調が少し厳しくなる。

もしかして「結婚前の女性が男と暮らすなんて！」とか思ってるのかな。

結婚前って言ってもなー。

男、って言ってもなー。

「はい。いけませんか？」

「いや、いけなくはないが・・・」

マックスとユリアちゃんがしばし見つめ合い、  
2人の間に微妙な空気が流れた。

ユリアちゃんは相変わらず屈託の無い笑顔だけど、  
明らかに「え？なんですかあ？」とすっ呆けた振りをしている。  
一方マックスは、最初は値踏みするようにユリアちゃんを見ていたけど、

やがてその目が、不思議な色を帯び始めた。

それは、ご両親に見せる目でもなく、  
私に見せる目でもなく、  
湊君の話をした時の目でもなく・・・

ユリアちゃんは心は女でも性別は男だ。  
そしてマックスは男が好き。

ユリアちゃんも自分を女だと思ってるから、恋の対象は男な訳で・・・



・

なんてピッタリな2人なんだろう。

私の中に、表現し難い気持ちが広がる。  
なに、このイライラした気持ちは？

すると、何を思ったのかユリアちゃんが突然一気にコーヒーを飲み干し、パツと立ち上がった。

「ごちそうさまでした、マックス！」

「え？ユリアちゃん、帰っちゃうの？」

「はい！お先に失礼します！」

それだけ言うと、ユリアちゃんは本当にレストランから出て行ってしまった。

・・・もしかして、貞操の危機を感じたのだろうか。  
マックスはそんな人じゃないもん。

「元氣な子だね」

マックスはユリアちゃんの後姿を見ながら呟いた。

「気になるの？」

「え？」

「・・・」

私は膝の上のナプキンに目を落とした。

私ってば、何をヤキモチみたいなこと言ってるんだろう。別にマックスと結婚するって決まった訳じゃないし、相手はユリアちゃんなのに・・・

ううん。ユリアちゃんだからだ。

ユリアちゃんは男で、私は女だ。

「僕らも出ようか」

マックスは私の言ったことを敢えて聞き流し、テーブルの上にナプキンを置き、立ち上がった。

「ハルはこの後、何か予定はある？」

「・・・いいえ」

普通だったらこの後ホテルに、なんてことが頭に浮かぶ。

私はこの時初めて「マックスがゲイじゃなければ良かったのに」と思った。

そしてそれと同時に、そう思ったのが今が初めてだということに驚いた。

そんなこと、一番最初に思いそうなことなのに・・・。

私、本当にマックスがゲイだなんてことはどうでも良かったんだな。

だってマックスはマックスだもの。

ユリアちゃんだってユリアちゃんだ。

ゲイとかレディボーイとか関係ない。

「ハル、お酒飲めるよね？ちょっとバーかどこかに行こうか」  
「はい」

私はユリアちゃんに負けないよう、  
とびきりの笑顔で返事した。

## 第16話 好きな人

大会社の重役が女の子を連れて行くバーって言うと、超高層ホテルの最上階の薄暗くって雰囲気のあるバー、ってのを想像しがちだけど、マックスが私を連れて行ったのはそんなところじゃなかった。

バーって言うより女の子向きのレストランといった感じの明るいお店で、

椅子は全てソファ。

テーブルもそれにあわせて猫足のローテーブルだ。

食事をするのには向かないから、やっぱり飲む専用のお店なんだろうけど、

まるで自分の部屋のようにリラックスできる。

お客の半数は女同士、残りの半数はカップル。

・・・。

「どうしてマックスがこんな店を知ってるんだろう、って顔してるね」

「えーっと」

私はキョドキョドしながらメニュー表に目を落とした。

バレバレじゃん。

でも幸いなことに、私が言い訳を考える間もなく、その答えが自らやってきてくれた。

「こんばんは、マックス。随分かわいいお連れさんじゃないの」

独特の柔らかさを含むハスキーボイスに顔を上げると、

30代くらいのス마트な女性がマックスの横に立っていた。

顔やスタイルは明らかに日本人だけど、

胸元の大きく開いた黒いTシャツや、長いドレッドヘアがとてもよく似合っていて、

身にまとっている雰囲気は完全にアメリカ人だ。

多分、こっちの暮らしが長いんだろう。

「ああ、サリー、久しぶり」

マックスがソファから立ち上がろうとすると、

サリーという女性はそれを手で軽く制して、自分がマックスの横にひざまず跪いた。

と、同時に2人が頬にキスしあう。

・・・まあ、親しい者同士の当たり前の挨拶だ。

こんな光景あちこちで見てるのに、  
思わず目を逸らしてしまう。

「来てくれて嬉しいわ」

「サリー、こちらはハルミ。ハル、彼女はサリナ。この店のオーナーなんだ」

大きな口とぽってりとした色っぽい唇が印象的なサリーさんは、  
笑顔で右手を差し出した。

「初めまして、ハルミ。あなた、日本人？」

「初めまして。はい、日本人です。留学してきました」

「そうなの。私も日本人だけど、10歳からずっとこっちに住んでるの。」

でも日本にもちよくちよく帰ってて、その時こんな感じのお店を見つけて、

『アメリカでもこういうお店は絶対流行るはず！』と思ったの。

マックスにはオープンの時、随分お世話になったのよ」

言われてみれば確かに、このお店の雰囲気というかスタイルは日本的だ。

「和」という意味ではなく、日本にあるカフェって感じ。

だからマックスは、私をここに連れてきてくれたのかもしれない。っていうか、絶対そうだ。

マックスってそういう人だ。

サリーさんはちょっとなじるようにマックスを見た。

「でも、マックスったら全然お店に来てくれないのよ」

マックスが肩をすくめる。

「こんな店に男一人で来れないだろ」

「カモフラージュでも彼女を作って来てくれたらいいのに」

「カモフラージュなんて面倒臭いよ」

どうやらサリーさんはマックスがゲイだと知っているらしい。

それにしても、マックスが「面倒臭い」だなんて言うなんて・・・この2人、本当に仲が良いんだな。

でも、マックスに限れば、女性であるサリーさんは本当にただの「友達」な訳で・・・

さっき「マックスがゲイじゃなければ」と思ったくせに、今はそのお陰でちょっとホッとしている私。

恋する乙女は自分勝手なのよ。  
ほっというてちょーだい。

私が一人で勝手に鼻をならしていると、サリーさんが再び私の方を見た。

「ハルミはマックスの彼女なのかしら？」

「いえ。そうなれたらいいなーと思ってますけど」

「私、正直な子って好きよ。一杯サービスしてあげる」

そう言ってサリーさんは、星が飛んできそうなウインクをした。

「姉御肌ってああいう人のこと言うのね」

「そうだね。ハルも意外とああいうタイプだと思うけど」

お酒が飲めると言ってもカクテル限定の私は、サリーさんがサービスしてくれた甘めのカルアミルクをせっかく美味しく頂いてたのに、マックスの言葉でむせた。

「私が姉御肌!？」

「うん。普段は甘え上手だけど、

いざって時は『私がやらずに誰がやる!』って感じになりそう」

「そうかな」

そんなこと初めて言われた。

「いっつも湊君に「もうちょっとしっかりして下さいよ!」って怒られてばかりだもん。」

「ユリアに対してがそうだよ」

「ああ・・・だってユリアちゃんてほんとけないんだもん」

「ほら、そういうところだよ」

「なるほど。今度湊君に『私だってしっかり者なのよ!』って言うとかなきや」

「あはは。ミナトに『どこが?』って言われそうだね」

何故かちゃっかり湊君のキャラを分かっているマックスは、

私が名前も聞いたことが無い透明のお酒を飲んでいる。

グラスの底からプチプチと泡が出てくるから、炭酸系のお酒なんだろう。

「話しておきたいことがあるんだ」

マックスが少し声を落として改まる。

「何?」

「ハルはミナトのことといい、ユリアのことといい、ちょっと誤解してるみたいだから。」

僕は確かにゲイだけど、好みはかなりうるさいんだ」



真面目腐ってそういうマックスに私は思わず笑った。

「それって湊君やユリアちゃんじゃ物足りないってこと？」

「そうじゃない。・・・いや、そうかな。でも、ミナトとユリアだけじゃない。

どんな男性でも・・・多分、女性でも、僕にとっては物足りないんだ」

「・・・どういう意味？」

マックスが舌を濡らす程度にお酒を飲んだ。

私も一口飲む。

飲みたかった訳じゃないけど、

これからマックスが本当は言いたくないことを、普段は心の奥底にしまってあることを、話してくれるような気がしたから、

自分の中で覚悟をしたかった。

そのためにお酒を飲んだ。

甘いはずのカルアミルクが少し苦く感じる。

「僕が今まで好きになった人は一人だけだ。それが日本人の男の子だった。

それで僕は自分がゲイだって気付いたんだ」

## 第17話 初恋

「僕が11歳の時、親の仕事の都合で東京から日本人の男の子が留学してきた。

アメリカ人から見ると、ほとんどの日本人は幼くて平坦な顔に見えるけど彼は違った。

女の子達が『かっこいい』と言って随分騒いでたよ」

こっちの女の子が日本人に対して「かわいい」ではなく「かっこいい」というのだから、  
本当に大人っぽくてかっこいい子だったんだろう。

「でも彼は英語が全く話せなかったし、アメリカの生活スタイルも知らなかった。

そんな彼に僕が声をかけたのは、本当に偶然で・・・学校の中にある売店で、

彼がどのコインが5セントか分からず困ってたから、教えてあげたんだ」

私はその光景を想像してちょっと笑った。

初めてドルを使う日本人って、

どのコインが何セントか分からないから、とにかくお札を使う。

で、おつりでコインを沢山もらうけど、やっぱり次の買い物のお札もお札で支払う。

こうやってどんどんコインが増えてお財布がパンパンになっちゃうんだよね。

私もそうだった。

コインを上手に使って買い物できるようになるまでには、ちょっと時間がかかる。

留学してきたばかりの小学生の男の子がコインでいっぱいになった財布を持って困ってたら、優しいマックスは声をかけずにはいられなかったのだろう。

「それから僕と彼は仲良くなった。僕が彼に英語やここでの習慣なんかを教えた。

彼も僕を頼りにしてくれて、僕達はいつも一緒にいたんだ。でも、」

マックスが一度言葉を切る。

でももうお酒には手をつけない。

目はグラスを見てるけど、その存在に気付いていないかのようだ。

「気さくで人懐っこい彼は、英語が上達すると共に友達がたくさんできていった。

僕達の友情は変わらなかったけど、僕の知らない彼が増えていったんだ。

僕はそれが無性に寂しくて腹立たしかった」

その気持ちはなんとなく分かるな・・・

私も、仲良しの友達が他に友達を作ると、ちょっと嫌だったもん。

でも、そんなことを正直に言えるマックスは凄いと思う。

裏を返せば、それほどの決意で話してくれているということなのだろう。

「しかも彼は女の子からも人気があった。留学して半年位した頃、彼は自分に告白してきたアメリカ人の女の子と興味本位で付き合い

でした。

彼は僕ともそれまでと同じように一緒に遊んでくれたし、普通なら友達として『彼女ができてよかったね』とでも言っていて一緒に喜んでやるところなのに・・・

僕は自分でもビックリするくらいショックを受けてた。

それで・・・気が付いたんだ」

マックスはグラスから目を離した。

でも視線をどこへ持って行っているのか分からないのか、目が泳いでいる。

そして結局視線は元の通りグラスへ戻った。

「驚いたよ。確かにそれまで好きな女の子ができたことはなかったけど、

それは自分がゲイだからだったのかって」

「・・・」

切り替えるかのように、マックスが明るい声を出す。

「そんなこと、それまで思ってもみなかったからね。すごく戸惑ったよ」

だけど再びマックスの声が落ちた。

さっき以上に。

「でも、誰にも相談できないし、ましてや彼に打ち明けるなんて・・・考えられなかった」

「・・・」

「ずっとこの気持ちは隠しておこうと思った。そうすれば彼とずっと友達でいられる、と。」

でも、その決意はあっさり砕けた。彼がみんなの前でふざけて彼女とキスをしたんだ。

みんなが冷やかす中、僕は耐えられずにその場で・・・」

マックスが自分の膝に肘を置き、頬杖を付いた。

大きな片手で顔の半分を隠すように覆う。

まるで過去の自分を恥じているかのように。

「馬鹿みたいなんだけど、かすかな期待をしてたんだ。

もしかしたら彼も僕を、とか、

僕の気持ちを知っても彼は今まで通り僕と友達でいてくれる、とか・

・  
だけど、現実はそのなに甘くなかった。

いや、当然の結果になった。

僕の気持ちをみんなの前で聞かされた彼は真っ青になって・・・僕を罵倒した」

「なっ！ひどい！」

私は思わず声を出したけど、マックスは軽く首を振った。

「普通の反応だよ」

「そんなことない！私、もし女友達が私のことを好きって言っても、罵倒したりしない！」

「それはハルが大人になったからだよ。小学生の頃だったらどう？自分のことを好きな女友達と仲良くできる？周りの目が気にならない？」

「それは・・・」

私は両手を握り締めた。

気にならないと言えば、嘘になる。

「彼は特にそうだった。留学してきたばかりで、これからここでどう自分の立場を作っていくかって時に、みんなの前で男友達に告白なんかされたんだ。怒って当然だよ」

そう、かもしれない・・・  
でも・・・

「クラスメイトもみんな僕を気持ち悪がった。

話はすぐに僕の親のところにも行って、親にも随分怒られたよ。とにかく取り消せ、隠せ、って言われた。

だけど結局そんなこともできなかった。

翌日から、誰も僕と口をきいてくれなくなったからね」

「そんな・・・」

「でも、これでよかったんだと思った。

やっぱりゲイってのは悪いことなんだ、いけないことなんだ、

これは当然の報復なんだ、と自分に言い聞かせることができた。

これでもうゲイなんてことはやめよう、やめれなくても隠して生きていこう、と思った」

「・・・」

「だけど、あれ以来彼とは一言も口をきいてないのに、僕は彼を諦められなかった。

彼が日本に帰った後もね」

「・・・今も？」

おそろおそろ訊ねる私に、マックスは少し笑いながら首を傾げた。

「分からない。でも、彼以上の男は・・・というか、人間には会ったことがないね」

「補足させてちょうだい」

気が付くと私達のテーブルにサリーさんが来ていた。

手に持っているお盆の上のお皿には何故かチーズケーキが2切れ。

「あ、これね、私が作ったチーズケーキなの。結構評判いいのよ。食べてみて」

「ありがとうございます。あの、それで補足って・・・？」

サリーさんが手早くお皿とフォークをセットしながら、私に向かって意地悪い顔で笑ってみせた。

「マックスと付き合いの長い姉御肌のサリー様が思うに、」

うつ。聞こえてたのね。ゴメンナサイ。

「きっとマックスは性別関係なく、素敵な人に惹かれるのよ」

マックスが目を丸くする。

「そんなの綺麗事だよ」

「でもマックスはまだ彼以上の人間に出会ったことがないんでしょ？もし彼以上の人間に出会えば、男でも女でも惹かれるかもしれないじゃない」

「そうだけど・・・。それより、サリー。僕、君にこの話したことあったっけ？」

「ううん。今立ち聞きしちゃった」

しれっとそう言うサリーさん。

ここまで悪びれないと笑ってしまう。

「ハルミ。いいこと教えてあげる」

「サリー！余計なことは言うな！」

「マックスは黙ってて。ねえ、ハルミ。マックスはゲイかもしれないけど、

彼女がいたことはあるのよ」

「えっ」

チーズケーキに伸ばしたフォークが止まる。

彼女！？

彼「女」！？

聞いてないし！

「何ですか、それ！？」

「サリー！！」

「マックスが大学生の時だったかな、マックスがゲイだと知っていたながら近寄ってきた女がいたの。」

『自分が本当にゲイかどうか私で試してみない？』ってね。悪い子じゃないのよ？

マックスも最初は乗り気じゃなかったんだけど、その子に押されて渋々付き合うことになったの。

結局別れたけど、半年くらいは続いたわよね？」

「サリー・・・本当に余計なことを・・・」

マックスが絶望的な顔になる。

だけどサリーさんはお構いなしだ。

「とにかく、マックスは女の子とも付き合えるのよ。

ただその子のことは人としてそんなに好きじゃなかったから別れた。



つまりマックスは男女関係なく人を見る。

これが私の『マックス論』。どう、ハルミ？」

ガチャン！

お皿とフォークがぶつかった大きな音に、マックスとサリーさんが驚く。

私のお皿の上ではチーズケーキが綺麗に真っ二つだ。

「マックス・・・」

「な、なに、ハル？」

「マックスってゲイなんでしょ？」

「うん・・・」

「だったら！」

私は、香ばしいタルトが付いてる下半分のチーズケーキが刺さったフォークを、

マックスにビシッと向けた。

「女なんかと付き合ってるじゃないわよ！正々堂々と男と付き合いなさい！」

「・・・」

「ハ、ハルミ？酔ってるの？」

サリーさんを見無視して私はフォークについてるチーズケーキを一口で食べ、

お皿に残ってるチーズケーキの上半分を、フォークで突き刺した。

「美味しい！」

「・・・ありがとう・・・」

「マックス！ゲイのくせして無理に女と付き合うなんて、ゲイの道に外れてるわ！  
邪道よ、邪道！」

「・・・」

私はチーズケーキの上半分も口に放り込むと、  
もごもごしながら「ごちそうさまでした！」と言って、  
ポカンとする2人を尻目にお店から出て行った。

## 第18話 呼び出し

サリーさんのお店から帰るなり私は、  
ベッドで丸くなって幸せそうに眠るユリアちゃんに夜這いをかけに  
いった。

とうっ！

「この野郎！」

「きゃあ！な、なんですか!？」

どっちが男か分かったもんじゃない。

「どうして先に帰っちゃうのよ!？」

お陰でなんか勢い余ってマックスに暴言吐いちゃったじゃない!!

「く、苦しいです、お姉様・・・上に乗らないで下さい!」

箸より重いものは持てませーん、って顔しておきながら、やっぱり  
そこは男の子。

力任せに起き上がられて、私はあっけなくコロンと床に転がった。

「もう!どうしてって、お姉様とマックスを2人きりにしてあげよ  
うと思ったんですよ!」

「うるしゃーい!」

「うるしゃーいって・・・お姉様。もしかして、酔ってます?」

「酔ってないもん・・・頭・・・痛い・・・」

「呆れた。二日たってないのに、もう二日酔いですか?」

「うるしゃーい！」

ううう。どうしてこんなに頭が痛いの？

「レストランでは飲んでませんでしたよね？あの後マックスとどこかで飲んでたんですか？」

「うん・・・」

ユリアちゃんのベッドの上で頭を抱えて糞虫みたいに丸まっていると、

「しっかりして下さいよ、お姉様」とどこかで聞いたことのある台詞を言いながら、

ユリアちゃんが濡らしたタオルを持ってきて、おでこにあててくれた。

「あひかとー（ありがとー）」

「全く・・・何をそんなに飲んだんですか？」

「かるあみるくー」

「何杯？」

人差し指を立てて見せる。

「一杯！？たった一杯でこんなになっちゃうんですか!?!」

「そーみたい」

「もうお姉様はお酒禁止です！」

大きな声出さないでえゝ

私は涙目でユリアちゃんを見上げた。

「ユリアちゃんが早く帰るのが悪いのよ」

「だって、ユリアとお姉様と一緒に暮らしてるって言ったらマックスが嫌そうな顔してたから、

これは2人きりにしたら何か進展があるかも！と思って気を利かせたんですよ？」

「・・・嫌そうな顔してた？マックスが？」

「思いつきしてたじゃないですか。マックスはお姉様が男と同居してるのが、嫌なんですよ」

確かに、いい顔はしてなかった。

でもそれは私が男と同居してるからではなくて、

一般的に結婚前の女が男と同居するのがよくないと思ってるだけで・

「今時そんなことで怒る人なんていませんよ。ましてやマックスは若いのに」

「でも」

「でももへったくれもありません。とにかくマックスはお姉様に気があると思います」

澄ましてそういうユリアちゃんに、私は頭痛も忘れてガバッと起き上がった、

けど、やっぱり忘れられなくて再びベッドの上にヘナヘナと崩れ落ちた。

枕を頭の上に乗せて、くぐもった声でユリアちゃんに訊ねる。

「・・・本当にそう思う？」

「多少は」

「・・・」

「だけどもあ、よかったじゃないですか」  
「・・・」

よかった、んだろうか。

じゃあ、このモヤモヤはなんだろう。

マックスに彼女がいたと聞いた時から感じているこのモヤモヤは。

・・・私、マックスを好きな女は私だけだと思ってた。

マックスがゲイだと知りながら、それでもマックスを好きと言えるのは私だけだと思ってた。

だからマックスを男に取られることはあっても、女に取られることはないと思ってた。

そう思って安心してた。

でも、もしサリーさんの言うように、

マックスが男女関係なく魅力的な人全てに惹かれるとしたら、私にはライバルがたくさんいることになる。

マックスがゲイなら、私のライバルは男だけだ。

マックスがゲイじゃないなら、私のライバルは女だけだ。

でも、もしかしたらその両方がライバルかもしれない。

その一方で、マックスは女でも好きになれるのかも、という淡い期待もある。

もしそうだとしたら、もしマックスが私に興味を持ってくれたら、こんなに嬉しいことはない。

だけど・・・

「マックスに彼女がいたなんて、ヤダ！！！」

「ど、どうしたんですか、急に？」

「ヤダ、ヤダ、ヤダー！！！」

この日、明け方近くまでくだを巻いていた私は、  
ユリアちゃんに本当に禁酒令を発令されたのだった・・・。

「俺に何の用なんですか」

私のお目付け役1号の湊君（2号は言わずもがなユリアちゃん）が、  
分厚い本を脇に抱えながらしかめっ面になった。

「知らないわよ。ルーク・コルテスが『ミナト・マセギと一緒にジ  
ュークスへ来て欲しい』、  
って言うんだから。ねえ、その本なんなの？」

「春美さんに説明しても分からないような、難しい古典文学です」  
「・・・」

相変わらずね。

「どうでもいいけど、それ持ってジュークスに行く気？」

「持って行きたくないっていうか、アイツのいるジュークスに行き  
たくないですけどね」

「もう。とにかく行こうよ」

私は、古典文学を持っていない方の湊君の腕を強引に引っ張って、地下鉄へ下りていった。

ユリアちゃんがうちに引っ越してきた日以来、私と湊君はちょっとギクシャクしていた。

マックスのことを非難する湊君に、私が冷たい態度取っちゃったからね。

気にはなってたけど、ユリアちゃんとドタバタの生活をしていたので、

湊君と会う機会もなかった。

でも、ルーク・コルテスに呼び出されたのを利用して、早速こうやって湊君の高校へ押しかけたのだ。

お陰ですっかりいつもの「振り回す春美さん」「振り回される湊君」だ。

いや、「すっかり」って訳じゃないかな。

根本的な問題は解決してない。

現に今も、校門の所で立っている私を見つけた時、湊君は嬉しそうな表情をしたけど、

私が「ジュークスへ行く」と言ったとたん、その表情は曇った。そして今も同じ表情のままだ。

「ちょっとー」



ちょうどホームにやってきた地下鉄に乗り、  
古典文学の間から湊君の脇をツンツンとつつく。

湊君がますます顔をしかめて身をよじる。

「いつまでそんな仏頂面してるのよ。似合わないわよ？」

「ほっといてください。元々こういう顔ですから」

「ふーん。でも、そんな顔だと嫌われちゃうわよ、女の子に」

「どうでもいいです、そんなこと」

「そうね。一人にさえ嫌われなければ」

「・・・」

「でも、あの人も、そんな表情の湊君は好きじゃないと思うけど」

湊君がぷいっと窓の外を向く。

地下鉄だから、窓の外はもちろん真っ暗だ。

だけど湊君の目はその暗闇を通して、

私には見えないものを見ている気がした。

## 第19話 Wedding&amp; Scout

ジュークスのいつもの社長室。

社長室を「いつもの」と言ってしまうようになるなんて、なんか偉くなった気分だ。

だけど、手放しに「居心地がいい!」とは言えない。

やっぱりどんなに優雅な部屋でも、V・I・P独特の澄ました空気と、

ある種の緊張感が漂っている。

特に今は、社長のルーク・コルテスと、妻のジャンヌ、

そして息子で専務で私の思慕の対象であるマックスが何故かちよつと緊張の面持ちで立っている。

更に付け加えると、私の後ろにはまだ仏頂面してる湊君もいる。

居心地の悪さ100%と言ったところか。

「ようこそ、ハルミ、ミナト」

ハルミ、ミナト、トマト・・・と、心の中で無意味にシリトリしてみる。

本当に無意味だ。

トマトだと永遠に繰り返せちゃうし。

こんな無意味な1人シリトリでは居心地の悪さは解消できず(当たり前だ)、

取り合えず私も笑顔でルーク・コルテスに「こんにちは」と返す。

湊君はジッとマックスを見ながら軽く会釈するだけだ。

ただどルーク・コルテスは自分で呼んでおきながら湊君のことは完全に無視して、  
にこやかにこう言った。

「早速なんだが、昨日マックスとジャンヌと一緒に、じっくり話し合った。

コルテス家として、正式に君にマックスとの結婚を申し込むよ」  
「・・・え？」

思わずマックスを見ると、マックスがちょっと照れ臭そうに小さく頷いた。

嘘・・・本当に？  
なんで？

この前、あんな暴言吐いたのに？

後ろから湊君の視線を感じたけど、  
今は振り向く余裕もない。

私はただただ呆然とした。

「受けてくれるね？ ハルミ」  
「あ、は、はい！」

深く考えることなく、元氣良く返事をする。  
だって、私は前から「マックスと結婚する」と宣言してたし。

・・・いいよね？

なんか、今になってドキドキしてきた。

私、結婚するんだ。

マックスと。

ルーク・コルテスとジャンヌが、ホッとしたような笑顔になる。

「よし、じゃあこの話はこのまま進めるとしよう。

だけど今日はもう1つ重要な話があるんだ」

「はい」

と、私は返事したものの、ルーク・コルテスの目はもう私を見ていなかった。

ルーク・コルテスの視線は私の後ろに注がれていた。

今度は私が無視される番のようだ。

つまり・・・私とマックスの結婚に関しては湊君は全く関係なく、これから話す「重要な話」には、私は全く関係ないということか。

この割り切り方がルーク・コルテス流なのね。

私はルーク・コルテスと湊君の邪魔にならないよう、黙って壁際に移動した。

湊君は訝しげな顔をしている。

「父さん」

「なんだ？」

ルーク・コルテスがマックスの方を振り向かず応える。

「もしかして、父さんも・・・」

「マックスもか。親子だけあって、考えることは同じだな」

なんだろう？

ルーク・コルテスが考えてるのと同じことをマックスも考えていた  
ってこと？

それって・・・？

「ミナト・マセギ君。君はハルミの従姉弟だったね？」

「いえ。あれは嘘です。ただの友人です」

さらっと本当のことを言う湊君。

でもルーク・コルテスは湊君以上にさらっとしてた。

「そうか。まあ、そんなことはどうでもいい」

どうでもいいのね。

「前に君を一目見た時から、ピンっときてたんだ」

ピンっと？

そう言えば前、私も同じことを言われた。

ルーク・コルテスは直感ひらめき型らしい。

「はあ」

要領を得ず、湊君が曖昧な返事をする。

「君、今高校生かね？歳は？」

「はい、18歳の高校3年生です」

「卒業は来年の7月あたりか？」

「いえ。僕は春美さんと一緒に留学生なので、卒業は来年の3月です」

「それ以降はどうする？」

「まだ決めていません。多分日本の大学を受験すると思いますが・・」

そう言えば前、マックスも私に同じようなことを聞いてきたっけ。

ルーク・コルテスは一体何が言いたいんだろう？

湊君もそう感じているのか、答える声に疑問の色が混じる。

だけど、ルーク・コルテスの次の一言でその疑問は一気に解決した。

「ミナト君。うちの会社の採用試験を受けてみるつもりはないか？」

「は？」

「え？」

私と湊君が同時に声を上げる。

マックスを見ると、マックスもやはりルーク・コルテスと同じことを言いたかったらしく、

満足そうな表情だ。

ルーク・コルテスが続ける。

「来年の1月にうちの採用試験がある。通常なら入社は9月からだ。しかし、君の場合3月に卒業するから日本のように4月から入社を

認めよう」

「・・・」

「ただし、君がハルミの友人だということは一切考慮しない。

それと、君に受けて欲しいのは普通の採用試験じゃない。教育プログラム適用者採用試験だ」

「教育プログラム適用者採用試験？」

「仕事をしながら会社の費用で大学に通ってMBAを目指すという教育プログラム、

その適用者を採用するための試験だ。

2年前から取り入れていて、今は5名ほどがこのプログラムでMBAを目指している」

「MBA・・・」

湊君が呟く。

「そう。もちろん大学入試には自力で受かってもらわないといけない。

もし入試に落ちたら、ただちに教育プログラムからは外される。

また、教育プログラムは、

会社での実務と大学での勉強、MBA取得のための勉強全て合わせて期間は8年。

その間にMBAを取らないと、実質クビだ」

「・・・」

「だが、上手く行けば給料を貰いながら会社の費用で大学に通えてMBAも取れる。

悪い話じゃないだろう」

確かに悪い話じゃない。

でも18歳の湊君にMBAを8年で取れと言うのは、かなり過酷だ。普通は会社の基幹職が目指すような資格なのだから。

多分今その教育プログラムを行っている5人というのも、どこかの会社からの転職者か、元々ジュークスにいる基幹職なのだろう。

難しいというより、不可能なんじゃないだろうか。

もしかしたらルーク・コルテスは湊君でそれを試したいと思っているのかもしれない。

「どうして僕にその採用試験を受けるように、勧めるんですか？」

湊君の表情はもう仏頂面ではない。  
いつもの湊君だ。

ルーク・コルテスがこの話を私の結婚話とは完全に切り離している  
ので、

湊君も今はこっちの話に集中することにしたようだ。

自分の未来がかかってるんだもんね。  
自分と、そして・・・

「さっきも言っただろう。前にハルミが君を連れてきた時に、ピン  
ツと来たんだ。

君ならやれそうだ、ってね。マックスもそうらしい。なあ？」

ルーク・コルテスが視線は湊君に残したまま、

少しマックスの方に振り向く。

マックスは「ああ」と言った。

「どうだね？ やってみたいか？」

「・・・」



「もうエントリーは終了してるが、そこは大目に見よう。

今月中にエントリーシートを私かマックスに直接提出してくれば、採用試験の受験資格を与える。

もつとも、教育プログラム適用者採用試験は大変な倍率だから、受けても受かるとは限らないがね」

どこことなく愉快そうなルーク・コルテス。

多分、湊君が採用試験を受けると、そして自力で受かってくると、思っているのかもしれない。

私もそう思う。

マックスが、壁に作りつけられている棚からファイルを取り出し、その中の大きな封筒を湊君に差し出した。

湊君はチラッとマックスを見て・・・睨むのではなく、ただ見て、その封筒を受け取った。

## 第20話 ティータイム

カーブで地下鉄が揺れ、車内の明かりがチカチカと点滅した。

昔の映画に出てくるような落書きはないけれど、設備面ではアメリカの地下鉄は日本に劣る。

だけど湊君が無言のまま中の書類を一度も取り出すことなく、ただ封筒を眺めているのは、時々明かりが消える車内では書類を読みにくいから、という訳ではなさそうだ。

湊君は分かってるんだ。

書類を読んでしまえば、自分がジュークスに惹かれてしまうことを。だけどそれは、ジュークスの仕事自体に魅力があるから、というよりも、来年の4月から社会人になって稼げるからだということも、湊君は分かっていると思う。だから書類を見れずにいるんだ。

でも、分かっているとは思うけど、一応忠告しておこう。

「湊君。一生勤める訳じゃないにしても、大事なことからしっかり考えた方がいいと思うよ?」

「・・・」

・ 「早く社会人になりたいとか、安定していればどこでもいいとか・・・」

そんな考え方で通用する会社じゃないよ、ジュークスは」

「・・・その言葉、そっくりそのまま返しますよ」

「え？」

湊君が封筒から目を見て、私を見る。

その目には、行きの地下鉄で見たような険しさがあった。

「確かに就職は一生物じゃないですけど、結婚は一生物です。

大事なことからしっかり考えてください」

「・・・」

「ましてや、ジュークスの次期社長夫人になれるから、なんて理由はもってのほかですよ」

「そんなんじゃないわよ！」

私の声は地下鉄のファーンという音にかき消されたけど、湊君には私が何と言ったか分かったはずだ。

「・・・すみません」

湊君は小さくそう言うと、

また視線を封筒に戻し、口を噤んだ。

今は自分のことで手一杯で、私とマックスのことに構っている余裕がないのだろう。

私はそう思い、ならば私も、と、自分の結婚に思いを馳せた。

でも、そうじゃなかった。

湊君はやっぱりしっかり者で、

自分の将来はもちろん、私とマックスのこともちろんと考えていた。

ただどそれが、とても湊君らしいやり方で表面化するのは、少し先のことだったのだ。

「わあ！かわいいお店ですね！」

ユリアちゃんが、天井からぶら下がっている花の蕾の形をしたライトを見上げて、目を輝かせた。

「でしょ？ユリアちゃんは絶対喜ぶと思ったの。

リザ向きじゃなさそうに見えるけど、お酒がとっても美味しいバーなのよ」

「へえー。じゃあ、何飲もっかな」

リザは店の内装よりも、カウンターの後ろに品良く並べられたボトルに早くも釘付けだ。

今日はサリーさんのお店に、リザとユリアちゃんを連れてきた。

前回酔っ払ってサリーさんの前で醜態を晒したことを謝りにきたのだけど、

どうせならと思い、3人で来たのだ。

マックスと来るより、新規のお客の方がサリーさんも喜ぶだろうし。

「あら、ハルミじゃない。いらっしやい」

サリーさんが、入り口に立っている私達を素早く見つけ、やってくる。

今日は上半身のラインがくっきり出ているロングのワンピースに白いエプロンといういでたちだ。

姉御肌オーラもちろん健在である。

「こんにちは。この前は大声で吠えまくってすみませんでした」

「いいえ。マックスにあんなこと言う人初めて見たわ。面白かったわよ」

それはよかった。

じゃなくって。

「あんなこと、って？」と首を傾げるリザとユリアちゃんは取り合えず置いておいて、

私はサリーさんに「チーズケーキを食べに来ました」と言い、案内されたソファに腰を下ろした。

「じゃあ、チーズケーキ三つね。飲み物は？」

「私、コーヒー」

「お酒、飲まないの？」

「そのレディボーイに禁酒令を発令されたんで」

私がふんつと顎でユリアちゃんの方を差すと、

サリーさんはユリアちゃんを見て、ちょっと目を大きくした。

「あらあ。なんてかわいらしいレディボーイなの！」

「えへへ。ユリアって言いますー」

「ユリアね。飲み物はどうする？」

「アイスティってありますか？」

「ええ」

「じゃあレモンで」

「分かったわ。えっと、あなたは？」

サリーさんがリザの方を見るとリザは、

「じゃあー、リザはコニヤックでえ」

と、大袈裟にユリアちゃんの口真似をした。

「リザさーん。ユリア、そんなじゃないですよお」

「そんなですよお」

「もう！リザさん！」

2人のやり取りをポカンと見ていたサリーさんがお腹を抱えて笑う。

「ふふふ、面白い子達ね。」

ねえ、私ももう仕事が終わるから、ご一緒させてもらってもいいかしら？」

「どうぞどうぞお。リザ、大歓迎ですうー」

「リザさん！！！」

こうしてサリーさんをまじえ、優雅な(?)ティータイムが始まったのだった。

「コニヤックとチーズケーキって合う？」

コニャックの入ったグラス片手にチーズケーキを食べるリザに、私は眉を寄せながら訊ねた。

「本当の酒好きは、酒をつまみに酒を飲むのよ。

当然、デザートのお供もお酒。ね、サリーさん」

「ええ」

そう言って頷くサリーさんは、細いグラスに入った真っ赤なビールを飲んでいる。

「なんですか、それ？」

「レッド・アイよ」

レッド・アイ？

「ビールとトマトジュースを混ぜたものの。昔はここに生卵を入れていて、

それが赤い目みたいに見えたことから、そういう名前になったのよ」

ビール・・・

トマトジュース・・・

生卵・・・

赤い目・・・

うえっ！

「わあ、綺麗なビールですね」

信じられないことにユリアちゃんが興味津々にレッド・アイを覗き込む。

「ちょっと飲んでみる？」

「はい！」

「ハルミは？」

うっ。

これを飲め、と！？

「・・・飲みます」

顔を引きつらせながら、なんとかそう答える。

ここは年下のユリアちゃんに負けてる場合じゃない！

私は覚悟を決めると、不気味に赤く輝くレッド・アイをゴクツと一口飲んだ。

その結果・・・

「うげえ~~~~」

「美味し〜い！」

私は慌ててコーヒーを口の中に入れた。

「ダメ！何これ！？全然ダメ！！」

「ええ？美味しいじゃないですか！ジュースみたい！」

し、信じられない！

これのどこが美味しいの！？

生卵こそ入っていないけど、

ビールでもなくトマトジュースでもなく・・・微妙！の一言に尽き



る!!!」

リザがふふんっと鼻で笑う。

「ちょっとちょっと春美。レッド・アイは比較的飲みやすいお酒なのよ？」

そんなんじゃ春美は酒豪にはなれないわね。

逆に16歳なのにこの味を美味しいって言い切れるなんて、ユリアちゃんは酒豪の素質があるわね」

そんな素質はいりません。

カルアミルク万歳！

私が青い顔でコーヒーをゴクゴク飲んでいると、ユリアちゃんが感動の面持ちでレッドアイの香りをかきながら呟いた。

「ケーキもアイステイもお酒も美味しくって、雰囲気がとっても可愛くって・・・

いいお店ですね。ユリア、こんなお店で働いてみたいなあ」

「あら。じゃあ、働いてみる？」

「へ？」

サリーさんの言葉に、

私とユリアちゃんとリザは、思わず顔を見合わせた。

## 第21話 守りたい

「ユリアみたいな可愛いウェイトレスがいたら、もっと男性客も増えるかもしれないわね」

にこにこしながらそう言うサリーさん。

正確にはウェイトレスじゃなくて、ウェイターだけだね。  
と、お酒の飲み比べ(?)で負けた私は心の中で皮肉なことを考えながらムクれた。

「いいんですか!？」

「私がここを辞めるから、ちょうど店員を1人募集しようと思ってたところなの」

「え!?! サリーさん、辞めちゃうんですか!？」

思わぬ発言にあっちの世界からこっちの世界へ舞い戻ってくる。  
だけどサリーさんは何食わぬ顔で「ええ」と言った。

「辞めるというか、今は店長兼オーナーだけど、店長を誰かに任せてオーナーに徹するって意味よ。」

このお店が軌道に乗ってきたから、他のお店も出したいの」

「他のお店・・・」

「そう。今度はことは全然雰囲気の違い、もっと大人の空間がいいかな。」

バー以外もやってみたいしね」

そう言ってサリーさんは、少し遠くを見るような目をした。  
これから新しく出すお店のことを想像しているのだろう。

・・・なるほど。

よく考えるとこのお店はサリーさんの雰囲気合うお店じゃない。どちらかと言えばサリーさんは、ジャズミュージックなんかが流れるワンショットバーにいいような感じだ。

サリーさんは「自分が勤めたいお店」を作りたい訳じゃなくって、トレンドに合う流行るお店をたくさん立ち上げたいんだ。そしてオーナーとしてその経営をしていきたいんだ。

サリーさんがグラス片手にちよつと意地悪く笑う。

「野心家だって思ってるでしょ？」

「そうですね。でも、かっこいい」

「相変わらず正直ね。ありがとう。」

実は私も元々はジュークスの社員だったの。そこでマックスとも出会ったのよ」

「え？サリーさんが？」

「ええ。でも大企業に勤めるより小さくても一から自分の力でお店を作って経営してみたくて、5年前に思い切って辞めちゃった」

「へえ・・・」

肩をすくめて、なんでもない事のように話すサリーさん。でも、勇気のいることだと思う。

大企業に勤めるより小さくても一から自分の力でお店を作って経営する、か・・・

そう。私が湊君に対して持っているイメージは正にこれだ。

大企業の一社員でもなく、

お店の従業員でもなく、

自分で一から作った小さな会社の経営者。

湊君にはそういう仕事が似合うと思うし、  
湊君もそういう仕事に憧れていると思う。

それを捨ててまで、湊君がジュークスに就職する理由なんて・・・

ある、な。

「ハルミ？」

「あ・・・あの。ジュークスで働いてみて、どうでした？いい会社でしたか？」

「そうね。私には合わなかったけど、いい会社だったと思うわ。  
仕事面にしても福利厚生にしても人間関係にしても」

そっか。ちよつと安心。

でもなあ・・・。

「どうして？ハルミ、ジュークスに勤めたいの？」

「いえ。私じゃないんですけど・・・そうだ！お知らせがあります  
！」

私が「はいっ」とばかりに勢い良く片手を上げて立ち上がると、  
サリーさんはもちろん、  
こんな私の突然の切り替えには慣れっこのリザとユリアちゃんもち  
よつと驚く。

「何よ、春美。急に」

「なんと！私も就職することになりました！」

「え？お姉様も？」

「はい！」

わざともしっかり咳払いなんかしてみる。

「私、坂上春美はコルテス家に永久就職いたします！」

「えっ」

「へっ」

「あら」

しーん、という静寂の後。

私の声が思いのほか大きかったのか、  
お店中から拍手とピューという口笛が起こった。

「あれ。えへ、どうもどうも」

日本人らしく片手で頭をかきながらペコペコお辞儀する。  
えへへへへ、照れくさいな。

「すごい、春美！貫いたわね！」

「まあね」

「さすがです！おめでとうございます、お姉様！」

「マックスが女と結婚ねー。でもハルミだったら上手くやれそうね」

でしょ、でしょ？

ルーク・コルテスから正式にマックスとの結婚を申し込まれた日、私は早速日本にいるパパとママに電話をした。

（今、夜中の2時なんだけど！って怒られたけど）

「ジュークスの社長の息子と結婚することになったの！」と私が言うのと、

「はあ！？あんた、騙されてるんじゃないの？」と心配してたけど、翌日アメリカから、ジュークスの社印とコルテス家の実印が押された手紙が届いたらしく、  
てんやわんやだったようだ。

それでもとにかく「年明けにアメリカで両家の顔合わせをしましょう」ということになり、

なんとルーク・コルテスがパパとママだけのために、自家用ジェットを日本へ迎えにやってくれるらしい。

パパとママがこの結婚に異論などあるはずもなく。

ただ問題があるとすれば、それは・・・そう、マックスがゲイだということだ。

でもそんなこと、パパとママに話したところでどうなる訳でもない。私はそれを分かった上でマックスと結婚しようと思っているのだし、マックスも受け入れてくれたんだ。

「と、いう訳で、結婚しまーす！」

「さすが猪突猛進娘」

「あ。リザ、猪突猛進の意味、分かったんだ？」

「うん。ハルミにピッタリね。ついでにユリアちゃんにも」

やっぱり？

「うわあ、お姉様がマックスと結婚・・・ユリア、なんか感動しちゃいました」

ユリアちゃんが目を潤ませる。

「えへへ」

「おめでとう、ハルミ。式はいつなの？」

「まだ具体的な話は全然なんです。でも、夏以降になると思います」  
「そうなの。へえ、あのマックスが結婚ねえ・・・」

昔からマックスを知っているサリーさんは、感慨もひとしおのよう  
で、

レッド・アイを少し飲んで細いため息をついた。

「色々言う人もいると思うけど、あなたがマックスを守るくらいの  
つもりで頑張ってね、ハルミ。

マックスはとても繊細な人だから」

「・・・はい」

そうだ。本当にその通りだ。

私がマックスを守らなきゃ。

昔マックスを傷つけた日本人の男の子の話を出す。

さすがにもう今のマックスに面と向かって酷いことを言う人はいな  
いだろうけど、

人の考えていることというのは、なんとなく分かるものだ。

優しいマックスは特にだろう。

私だって強い人間じゃないけど、

目の前でマックスが傷つくのは見てられないと思う。

でも、どうすればマックスを守れるんだろう。  
どうすればマックスが傷つかずに済むんだろう。

私はちよつと肩を落としてソファアに座ると、  
サリーさんの前に置かれているグラスを見つめた。

赤い液体に私の顔が映る。

それは私の想いを表すかのように、  
小さな泡でユラユラと揺れていた。



## 第22話 呼び出し2

オーディションに合格したから、とジュークスに呼ばれた日にマックスと歩いた公園。

12月になって寒さも本格化してきたから、昼下がりのこの時間はもう人が少ない。

私はユリアちゃんと色違いのお揃いで買った白いファーボレロに身を包み、

白い息を吐きながら少しでも暖を取ろうと噴水から離れた所にある外灯の下に立っていた。

本当に寒い。

タイツとブーツははいてるけど、無理してスカートで来るんじゃないなかつた。

でもこのスカート。

一目惚れして買ったから、どうしても今日はいてきたかったんだもん。

一目惚れしたマックスとのデートにはピッタリじゃない？

首をすばめたまま顔を上げると、ジュークスの大きなビルがすぐそこに見えた。

もうすぐあそこからマックスが出てくる。

待ち合わせの時間まであと10分だ。

寒いから早く来て欲しい。

早く一緒にどこか暖かい所へ入りたい。

でも、この寒い中、両手をすり合わせながら好きな人を待つっていうのも悪くない。

風邪を引かなければ、だけど。

「早いね。ごめん、待った？」

「ううん」

幸い、マックスは私が「寒い中、彼を待つ彼女」を楽しむ余裕がまだあるうちに公園へやってきた。

それでも手袋の下の指の感覚はもうない。

思わず手袋の上からハーツと息を吹きかける。

「行こうか」

「うん」

マックスが歩き出す。

私とマックスは40センチ近く身長が違うから、一緒に歩くのは大変だ。

もちろんマックスはゆっくり歩いてくれるけど、それでも・・・

そうだ。前にここをマックスと歩いた時も同じことを思ったっけ。

そしてその後、マックスにゲイだとカミングアウトされたんだ。

あの時は驚いたなあ、なんてほんの1ヶ月前のことを何年も前のことのように思い出す。

でもマックスは私を結婚相手を選んでくれた。

ゲイという生き方ではなく、私との人生を選んでくれたんだ。

これ以上の愛情はないと思う。

「マックス、ありがとう」

「え？何が？」

「私と結婚するって決めてくれて」

マックスは心底驚いたような顔をして立ち止まった。

「何言ってるの。お礼を言うのは僕の方だよ。」

僕なんかと結婚してくれる女性がいるなんて、まだ信じられないくらいだ」

「私は好きな人と結婚したいって言っただけ」

私がいっつになく真剣にそう言うのと、

マックスはフツと笑った。

ちょっとニヒルで、それでいて優しさに溢れているマックス独特の笑い方だ。

「本当に信じられないよ、ハルは。でも、ありがとう。」

ハルといったら、僕も立ち直れる気がする。

・・・不思議だな、僕が結婚するなんて」

「私も不思議。私が結婚するなんて」

私とマックスは微笑み合い、

クリスマスに彩<sup>いろど</sup>られた街へと向かった。

デコレーションされた建物。

あちこちから流れてくるクリスマスソング。

寄り添う恋人達。

言葉の説明だけだと日本のクリスマスと一緒だけど、アメリカにはどこか「本場」という雰囲気がある。

それは、日本ではクリスマスは「単に楽しむための日」という考え方なのに対して、アメリカでは「楽しむための日であると同時に、キリストに対して敬意を払う日」という考え方だからかもしれない。

豆電球で作られたサンタクロースとトナカイが飾られたショーウィンドウを横目で見ながら、マックスが呟いた。

「指輪がいるね」

指輪！

私の気分が最高潮に盛り上がる。

「そうよね！結婚指輪、いるわよね！」

だけど大興奮の私にマックスはちよつと戸惑ったようだ。

「え？ああ、結婚指輪か。僕は婚約指輪のことを言っただけだっ

ただけど」

婚約指輪？

あ、そっか。婚約指輪が先よね。

でも、婚約指輪っていうと、

ロマンチックなシチュエーションで彼氏がいきなり彼女に、

「結婚して下さい！」とか言って差し出すものでしょ？

私達の場合、もう結婚が決まってる訳だし・・・

でへへへ。

「結婚が決まってる」ってなんて素敵な響き。

嬉しさのあまり、つい心が寛大になる。

「婚約指輪はいらないわ。それよりそのお金を新生活の準備のために使いましょ」

「いいの？」

「うん！」

幸せですから！

「あはは、しっかり者だなあ」

「その代わり結婚指輪はちょっと奮発したいな。一生付ける物だし」  
「そうだね。ハルの指のサイズは？」

サイズ？アメリカでも日本と同じ考え方なのかな？

「日本のサイズで言えば、7号よ」

「7号・・・ハル、指輪は小指につけるんじゃないよ？」

知ってますとも。

「あ、新生活で思い出したけど、住む場所はどうする？」

ハルが嫌でなければ、うちの家でどうかな？部屋が有り余ってるし、何棟かに分かれてるから、僕の両親とは別の建物に住めばいいし」  
「・・・」

な、なんか別次元の話ね。

もちろん貧乏人の私に異論などあるはずもない。

私がそう言うのと、マックスはホッとしたようだ。

「実は母から、是非一緒に住みたいって言われてたんだ。  
僕とじゃなくて、ハルとね」

「あら」

ありがとう、お母義様。

ハルミは嬉しいです。

「娘ができるのが嬉しいらしい。」

一緒に料理するのを楽しみにしてるよ」

おーっと！

忘れてたあ！

まずい・・・

湊君と喧嘩してる場合じゃないわ。  
料理教室を再開してもらわないと。

肉じゃがってゼラチン入れるんだっけ？

・・・だけど。

私はマックスを見上げた。

マックスも私の視線に気付き、微笑みを返す。

マックスとこんな会話ができるなんて本当に幸せ。

道で倒れてマックスに助けられた時は、

こんな日が来るなんて夢にも思わなかった。

それも、こんなに早く。

サリーさんが言っていた、マックスを守る方法はまだ見つけられずにいる。

でも、今はそんな必要もないように思える。

ただ、マックスと一緒にいれればいい。

何もする必要はない、何もしてもらわなくてもいい。

これで充分。

私がマックスの腕に手を伸ばしかけたその時、

私の鞆の中で携帯が鳴り出した。

「あっ」

湊君からだ！

「ごめん、マックス。湊君なの。出ていい？」  
「もちろん」

マックスは快く許してくれたけど、  
私がマックスと一緒にだと知ったら湊君の方がまた気を悪くするかもしれない。

私は電話口を手で覆った。

・・・こういう気を使うの、嫌なだけだな。

湊君はなんだかんだ言って私にとって大切な人だ。  
だから湊君が嫌な思いをすることはできるだけしたくない。  
でも、そう思う一方で、私の結婚を湊君にも喜んで欲しいという気持ちもある。

早く湊君にマックスとのことを認めて欲しい。

「はい」

「春美さん。今、マックスと一緒にですよ？」

「・・・どうして知ってるの？」

湊君の口からマックスという言葉を聞くとドキッとする。

だから。

こういうのが、嫌なんだって。

「俺今ジュークスに来てるんです。受付でマックスの呼び出しを頼んだら、

今日は早退したって言うから、多分春美さんと一緒だろうなと思っ



て」

湊君がジュークスにいる？

しかも、マックスに会うために？

「すみませんけど、春美さんも一緒にちょっと戻ってきてもらえませんか？

すぐに済みますから」

真剣な湊君の声が耳に響く。

有無を言わせぬその言い方に、私はただ頷くしかなかった。

## 第23話 やっぱり小悪魔

信じられないことに湊君は社長室にルーク・コルテスと2人でいた。そこに私とマックスが加わる。

ごく普通の高校生である湊君が、ジュークスの社長と専務を呼び出すなんて、

一体何をするつもりなんだろう。

湊君がルーク・コルテスに向かって口を開く。

「今日はマックスに話があって来ました。

でも、ルークさんにも一緒にいてもらいたいんです」

「ああ、構わないよ」

「お忙しいのに、すみません」

社長さんなんだ、「お忙しい」どころの騒ぎじゃないだろう。

でも、ルーク・コルテスは湊君に興味があるからなのか、嫌な顔一つせず、悠然と椅子に座って私達3人を見ている。

湊君はルーク・コルテスに少し頭を下げてから、マックスの方を見た。

と。とたんにその口調が変わる。

「俺はやっぱり、あんたと春美さんの結婚は認められない」  
「ちよっと！湊く、」

私は思わず湊君を止めようとしたけど、マックスがそれを目で制す。

湊君に好きなように言わせろ、という意味らしい。

私は仕方なく口を噤んだ。

「俺は春美さんの家族でもなんでもないから、俺が認められないと言ったところで、

2人の結婚がストップすることがないのは分かってるけど、

春美さんの友人として・・・昔、春美さんを好きだった男として言わせてもらう。

あんたは絶対春美さんを幸せにはできない」

「・・・」

マックスが湊君の言葉に耐えるかのようにちよつと目を細める。

私はもう既に耐えられず、視線を床に落とした。

「あんたがゲイだからってこともある。でも、それだけじゃない。

そもそもあんたは春美さんを幸せにする気があるのか？

単に自分と結婚したいと言ってくれる女が現れて、

ここぞとばかりに結婚しようと思ってるだけだろ？

これで世間から『あいつはゲイだ』って見られなくてすむ、

あわよくば自分がゲイだってことを自分自身も忘れられるかもしれない、

そう思ってるんだろ！」

「湊君！何言ってるのよ！」

もう本当に我慢できない！

私は湊君に歩み寄り、その腕を掴んだ。

「帰って！」

「うるさいっ！」

湊君が私の手を振りほどく。

その力任せの乱暴さと、怒りに満ちた目に私はおののいた。

こんな湊君、初めて見た。

こんなの、湊君じゃない。

「マックス。あんたは自分が幸せになりたいだけなんだ。

春美さんとの結婚はその手段に過ぎない。

そんなんじゃ春美さんは絶対幸せになんかなれない！

もしちよつとでも春美さんを好きなら、春美さんの幸せを願うなら、さっさと春美さんと別れろ！」

「・・・」

私はもはや言葉もなく、真っ青になって立ちつくした。

ルーク・コルテスも何も言わないけど、その表情は変わらない。

そしてマックスは・・・

苦痛に耐えるような表情のまま口を堅く結んでいる。

どうして？

どうして何も言い返さないの？

どうして湊君に「そんなことない」って言ってくれないの？

「なんで、何も言わないんだよ？」

湊君が私の気持ちを代弁する。  
そして、マックスの気持ちも。

「俺の言ったことが当たってるからだろ？  
だから何も言い返せないんだよな」  
「・・・」

マックス・・・

何か言って。  
お願い。  
何か言って。

私は祈るような気持ちでマックスを見たけど、  
聞こえてくるのは湊君の声だけだった。

「やっぱりそんなんじゃ、俺はあんた達の結婚を認められない。  
あんたのことを許せない」

そして今度は私の腕が掴まれた。

「分かっただろ、春美さん。こいつは所詮、こういう奴なんだよ」  
「・・・湊君・・・」  
「帰ろう」

だけど湊君は「あ、そうだ」と言って私の腕を放した。  
その声は、一瞬にしていつもの湊君に戻っている。

「ルークさん、お騒がせして申し訳ありません。」

エントリーシートを持ってきました」

「あ、ああ」

さすがのルーク・コルテスも、湊君の素早い切り替えにちょっと戸惑う。

が、そこは「さすがの」ルーク・コルテス。

すぐに何事もなかったかのように笑顔で湊君が差し出した封筒を受け取った。

「確かに受け取ったよ。採用試験の結果を楽しみにしている」

「はい。頑張ります」

湊君はそう言って一礼すると、

再び私の腕を取って、社長室を後にした。

「怒ってます?」

当たり前でしょ。

ほんの1時間前までの浮かれた気分が嘘のようだ。  
道に流れるジングルベルも遥か遠くの世界のことに思える。

「春美さんには悪いけど、俺は言いたいこと言ってすっきりしました」

「・・・あのね」

明るい色のダウンジャケットを羽織った湊君が、  
うーっん、と気持ち良さそうに背伸びする。

ダウンの色に負けないくらい明るい表情で。

「エントリーシートも無事提出できたし、後はクリスマス休暇を楽しむばかり、です！」

「・・・」

「でも、採用試験の勉強しないとダメだから、今年は日本に帰って暇はないな。」

春美さんは帰るんですか？」

帰らないわよ。

年明けすぐ、両親がこっちに来る予定だからね。

湊君のお陰で、ぶち壊しになるかもしれないけど。

それに。

「どこが『無事提出』な訳？社長の前で息子の専務に向かってあんなこと言って、

受かるとでも思ってるの？」

「さあ。でも、言いたいことを言わずに受かってても、

『やっぱ春美さんの友人っていう肩書きが物を言ったのかな。俺の実力じゃないのかな』って、

思っちゃうと思うんですよね。

あそこまで言って受ければ、正真正銘俺の実力です」

「・・・」

「2人のことは、後は勝手に何とかしてください。あー、すっきり

した!」

「・・・はあ」

なんか、怒るのも馬鹿らしくなってきた。

肩の力が抜けたとたん、ジングルベルや雑踏が戻ってくる。

湊君もさっきとは別人のようにのん気に「クリスマスの街っていいですねー」とか

言ってるし。

・・・分かってる。

湊君は私のことを本当に心配してくれてるんだ。

あそこまで言ってくれる人なんてそうそういない。

湊君が私とは反対の方を向きながら、ボソツと言った。

「俺、春美さんとクリスマスにこうやってデートするのが夢だったんですよね・・・」

「え?」

驚いていると、湊君がパッと私の方に振り返り、意地悪い顔をして笑った。

「中学校時代」

・・・何よ。ビックリさせないでよ。  
ちよっとドキッとしちゃったじゃない。



「あっそ。何年もの時を経て、夢が叶って良かったわね」

嫌味たっぷりですう返すと、  
急に肩を引き寄せられた。

と同時に、唇に柔らかいものが触れる。

「・・・何するのよ」

湊君の顔が私のそれから離れる。

「よし。これでもう思い残すことはありません。

マックスのことは認められませんが、

2人がそれでも結婚するっていうなら、勝手にしてください」

「・・・」

そう言って爽やかな笑顔になる湊君。

やっぱりこいつは、小悪魔男だ。

## 第24話 クリスマスイブ

クリスマスって、クリスマスイブまでが一番盛り上がるんだよね。肝心のクリスマスの朝はなんかもう「祭の後」って感じで、

12月26日に至っては「クリスマスかー。そんな事もあったな・・」状態。

だから、クリスマスを楽しむには、やっぱイブでなきゃ！  
っていうのは、余りにも俗っぽいかな。

でもそこはお国柄は関係ないらしく、  
アメリカでも毎年、クリスマスよりクリスマスイブの方が盛り上がる傾向にある。

その理由はやっぱり、クリスマスイブの夜にサンタからプレゼントが届くから、だろう。

と、色々理屈を捏ねてはみたけど、とにかく私はクリスマスイブの今日、  
プレゼントを手にはじゅー克斯を訪れた。

袋の中にあるのは、柄にもなく手編みのマフラー。

一生に一度くらいこんなベタなことしてもいいじゃない？  
時間がなくて、予定よりちょっと短いマフラーになっちゃったけど。  
(且つ、ユリアちゃんトリザにも手伝ってもらったけど)

私はじゅー克斯のビルの前で立ち止まり、  
天高くそびえるそれを見上げた。

普段でも高く見えるビルだけど、今日の私には灰色の雲を突き抜けているようにさえ思える。

湊君の奇行（としか言いようがない）から3日が経っていた。

マックスからは何の連絡もない。

私からしようかとも思ったけど、

マックスが何か考えているのなら、そっとしておいた方がいいと思  
い直し、やめた。

湊君がマックスに言ったことは確かに極端ではあった。

でもまるっきりの外れな発言という訳ではなかったのだろう、  
だからマックスは言い返せなかったんだ。

悲しくはない。

マックスは辛い思いを沢山してきたから、

結婚について考えることがありすぎて、

湊君が言ってたようなことまで頭が回らなかったんだと思う。

そりゃ湊君が言ってたのは大切なことだけださ・・・

ショックなんて受けてないけどさ・・・

じゃあ、どうして私はこのビルに入るのを躊躇っているんだろう。  
どうしてマックスに何も言わずにここまで来てしまったのだろう。

私は、マフラーの入った紙袋を胸に抱き締めた。

やっぱり帰ろうかな。

そもそも、今日はほとんどの会社は休みだ。

ジュークスだってそうだろう。

マックスはここじゃなくて自宅にいる可能性が高い。

それなのに、マックスの自宅ではなくこっちに來たのは、心のどこかでマックスに会うことを怖れているのかもしれない。

マックスに会って、「やっぱり結婚はやめよう」と言われることを・

「あら。サカガミ様」

「・・・え？」

顔を上げると、目の前にナイスバディな美女が立っていた。

この人、確か・・・

「オーディションの時の秘書さん、ですよね？」

そう。あのオーディションの時、ルーク・コルテスの横で書記役をしていた秘書風の女性だ。  
どうしてこんなところに？

秘書さんが優雅に頷く。

「こんにちは。私、人事部のクラウド・ウィルソンと申します」

「秘書さんじゃないんですか？」

「ええ。あの時は、一応『採用面接』ということで、社長のお手伝いをしていました。」

「結婚、おめでとうございます」

「・・・ありがとうございます」

と、言っているのだろうか。  
でも、確かに婚約中だし。  
まだ、破棄と決まったわけじゃないし。

私の微妙な返事に気付いてないのか、  
それとも敢えて気付かない振りをしてくれているのか、  
クラウディアさんはちょっと小さな声で楽しげに言った。

「しかも、サカガミ様のお陰で、予定外にもう一人『採用』候補が  
できました」

「え？」

「ミナト・マセギさんです」

湊君？

ってことは！

「決まったんですか！？」

「いえ。採用試験は来月ですから。でも、エントリーシートを見る  
限り、

学歴、問題解決能力、人間性など、とても優れていると思います」

「そうなんです！」

私は思わず手をグーにして、クラウディアさんに向かって一歩踏み  
出した。

「湊君、中学時代からずっと成績トップで、アメリカに留学してき  
たんです！

働く気も満々ですし！」

「そのようですね。」

でも、エントリーシートの印象からして、彼は大企業向きではない

と思うのですが」

さすがジュークスの人事部の人だけはある。

湊君に会ったこともないのに、湊君の本質を見抜くとは。

と、私は感心したのだけど、

クラウディアさんは苦笑しながら首を横に振った。

「違います。エントリーシートに書いてあったんです」

「へ？」

「経営能力を身につけたいから、教育プログラムを受けてみたい。

でも、1人でやっていけると思ったらジュークスを辞めるかもしれない、と」

「・・・」

「凄く正直な方ですね。そんなこと、みんな思っても絶対書かないのに」

そ、そうきたか・・・。

そりゃあそれが、湊君にとってはベストだけど・・・。

私は湊君のあまりの馬鹿正直さに呆れて物も言えなかった。

「でも、そういう考え方なのは当然です。MBAを狙うくらいですからね。

教育プログラム受講者がMBAを取った時に『やっぱりこの会社で働きたい』、

と思えるような魅力的な会社にすることが、私達に課せられた使命です」

「なるほど・・・」

うん。そうかも。

「どうですか、サカガミ様も大学卒業後にうちに就職されてみては」  
「は？」

今度は思わぬ提案に驚きすぎて声が出ない。

「専務とご結婚されてサカガミ様がコルテス家の方になれば、サカガミ様は間違いなく、『ジュークスを魅力的な会社にする』側の人間になります。

専務を支えるという方法でそれをされるのも大事なことだとは思いますが、

サカガミ様の場合、ご自分で働かれる方が性にお似合いかと」  
「・・・」

やっぱりこの人は凄い。  
あのオーディションでの私の話を聞いただけで、ちゃんと分かっている。

そう。私も湊君ほど優秀ではないにしても、湊君と同じ道を歩んできました。

将来は当然どこかの企業で男の人に負けないくらいバリバリ仕事をするものだと思ってた。

マックスとの結婚話が出てから、  
その将来像は大きく変わったけど・・・。

「・・・ありがとうございます。ちょっと考えてみます」  
「是非そうしてください。私なんだか、サカガミ様とは一緒に仕事ができる気がするんです」

クラウドディアさんが、大きな目を細めてふふふっと笑う。

私が仕事、かあ。  
この人と一緒に。

・・・ふーん。

「ところで、今日は何の御用でいらっしゃったんですか？

私は少し雑用があつて出てきましたが、

今日は会社はお休みですので、社長も専務もいらっしゃいませんよ」

あ。

やっぱり！

「ですよね・・・マックスは自宅ですよね・・・」

ガッカリしたような、ホツとしたような。

ただクラウドディアさんは「いいえ」と首を振った。

「専務は出張です」

「出張？」

聞いてないし！

って、連絡取ってないから当たり前か。

「お仕事半分、プライベート半分の出張ですけどね。今日の午後、戻って来られます」

「そうなんですか・・・。あの、どこに？」



婚約者のくせにそんなことも知らないのか、と思われるんじゃないかと思ったけど、クラウディアさんはやっぱりプロだった。

そんな雰囲気は微塵も感じさせず、にこやかにこう言った。

「日本です。東京へ行くとおっしゃっていました」

## 第25話 待ち伏せ

マックスが東京に「仕事半分、プライベート半分」で出張。

なんだろう、プライベートって。

私の親に会いに行ったのかな？

でもそれなら私に一言そう言うはずだ。

それに私の実家は東京じゃなくて静岡だし。

じゃあ、ただの東京観光だ。

うん、そうに決まってる。

私は自分を納得させて、

まだ正午になったばかりだというのにベッドに潜り込んだ。

いつもは隣の部屋にいるユリアちゃんも、今日は朝からいない。

湊君のアパートの住人全員で、クリスマスパーティーがあるそうなのだ。

ユリアちゃんは私も誘ってくれたけど、

「あ。イブなんてマックスとデートに決まってますよねー」と、私が返事をする前に1人で勝手に納得してしまった。

でも、お陰で助かった。

今日は1人でいたい。

マックスが日本に行った目的。

そう、それは観光なんかじゃない。

マックスは初恋の男の子に会いに行ったんだ。

どうしてそう思うのかは分からない。

だけど私の第六感が間違いないと告げている。

そして、昔自分を散々傷つけた男の子に今更会って、マックスが何をしようとしているのか。

それもなんとなく分かる。

きつとマックスは、もう一度その男の子に罵倒されようと思っているのだろう。

男の子に昔のように罵倒され、

やっぱりゲイじゃダメなんだ、と自分に言い聞かせて、

私との結婚に踏み切ろうとしてるんだと思う。

でもその男の子も、今はマックスと同じ24歳の大人の男の人だ。

マックスと再会したからといって昔と同じようにマックスを罵倒するとは限らない。

その人は、マックスを見てどうするだろう・・・

大人げなく、また罵倒するだろうか。

マックスのことなんて忘れているだろうか。

それとも、マックスの気持ちを察して、敢えて罵倒するだろうか。

いや、多分・・・普通に接するんだ。

マックスがゲイだということには一切触れず、  
愛想良く「やあ、久しぶり。会えて嬉しいよ」とか言っ  
ても内心じゃ「何しにきたんだ、こいつ」とか思っ  
てるんだ。

それが普通だ。

普通の大人だ。

でも、その人がどんな態度を取ろうとも、マックスが傷つくことに  
変わりはない。

・・・そんなの嫌だ。

私は布団を巻き込むようにして丸くなった。

今この瞬間にも、遠い日本でマックスが傷つけられているのかわし  
れないと思うと、  
胸が締めつけられる。

マックスが私に対して恋愛感情がないのは明らかだ。

それは最初から分かってることだし、私も求めていない。

ただ、私と家族としてやっていけると思っただけで充分。

だって、私は偶然マックスに一目惚れしたけど、

これはお見合い結婚だ。

だったら、こういうものでしょ。

だけど、もし湊君の言葉でマックスが、私と家族としてもやってい  
く自信をなくしたのなら・・・

布団に丸まったまま身体を起こし、ベッドの上に座る。

顔だけ布団の間から覗いているから、

傍目には大きな天ムス状態だ。

もし本当にマックスが私と家族としてやっていく自信をなくしたのなら、

例えば日本でわざと辛い思いをして私との結婚に踏み切ろうとしても、私は嫌だ。

だって、普通の恋愛関係は成立しえない私とマックスの間から、家族愛まで取ってしまったら、一体何が残るといえるだろう。

今、マックスがやろうとしているのは無駄なことだ。

家族愛がないなら、私との結婚をやめればいい。

無駄に傷つくことはない。

マックス、早く帰ってきて。

話をするなら、初恋の男の子とじゃなくて、私としようよ。

私は再びベッドに転がり、目をギュッと閉じた。

午後になってついに雪が降り出した。

ホワイトクリスマスイブ。

どんなに寒くても、この日ばかりは苦にならない。

実際、待ち行く人達も、

扉から木枯らしが入り込み暖房が意味をなさない空港のロビーにいる人達も、

一様に幸せそうな顔をしている。

到着ゲートから、大きなスーツケースを転がしながら、

サラリーマンっぽい日本人の男の人が出てきた。

手には、成田で買ったのであろう、日本語がプリントされた紙袋を持っている。

その彼の元に、奥さんらしいアメリカ人女性とハーフの女の子が駆け寄った。

英語の会話の断片が聞こえてくる。

『おかえり、パパ！お土産買ってきてくれた？クリスマスプレゼントは？』

『ただいま。クリスマスプレゼントはサンタさんがくれるものだろう？』

『何言ってるのよ！サンタさんなんていないのよ。お隣のミラが言ってたもん』

男の人が困った顔をして奥さんを見る。

奥さんも苦笑いだ。

『わかった。じゃあ今からクリスマスプレゼントを見に行こう』

『自転車がいいなあ』

『自転車だな、よし』

3人は女の子を真ん中に、手を繋いで扉の方へと歩いていった。

・・・幸せな家族そのもの、って感じだなあ。

私もあんな普通で暖かい家庭を持ちたい。

できれば、マックスと。

そしてできれば、子供と。

私は手袋の上から息を吹きかけた。

もう空港に来て5時間が経つ。

クラウドディアさんに、マックスが今日の午後帰ってくると聞いたからやって来たのだけど、

うっかりして何時の便かを聞き忘れた。

だから、成田からの午後の到着便の一つ目の時間に合わせて来てみたものの、

敢え無く空振り。

こうして次の便を待つことになった。

外はもう真っ暗だ。

もちろんずっとここに座っていなくたっていい。

でも、今マックスは飛行機の中で何を考えているんだろうと思うと、立ち上がる気になれなかった。

扉の方を見ると、もうさっきの家族連れはいない。  
バスか車で家へ帰って行ったのだろう。

あ。違うか。自転車を買いに行くって言ってたっけ。

それから帰るんだ。

我が家へ。

さっきベッドの中で、私は必死に思考回路を動かした。

もしこのままマックスと結婚したとして、

私とマックスは本当に幸せになれるのだろうか、と。

正直、分からない。

マックスは結局辛い思いをするのかもしれない。

そんなマックスと一緒にいても、私も辛いかもしれない。

でも、一つだけ確かなことがある。

それは、私はマックス以外の人と結婚しても幸せになれないってことだ。

だってマックスが好きだから。

私は、

マックス以外の人と結婚して幸せになれる確率が0%なのなら、1%でも幸せになれる確率のあるマックスとの結婚に賭けてみたい。

そして、その賭けに勝つか負けるかの鍵を握るのは・・・



到着ゲートから出てくる人の間に、綺麗な金髪が見え隠れする。

私は冷たいプラスチックの椅子から立ち上がると、  
人波に逆らい、ゆっくりと歩き始めた。

## 第26話 プレゼント

「ハル？」

マックスが私を見て驚き、急に足を止めた。  
その背中に、後ろの人がぶつかる。

「あ、すみません・・・ハル、どうしたの？」

「おかえり、マックス」

私はマックスにいきなり紙袋を差し出した。

「これ、持ってきたの。クリスマスプレゼントだから、どうしても今日渡したくって」

「ハル・・・あのさ、」

「聞いて、マックス」

ちょっと強引にマックスの言葉を遮る。

周りにはたくさんの人がいるけど、  
みんな出迎えの人との対面を喜んでいて、誰も私達なんて見ていない。

私は40センチ上のマックスに聞こえるように・・・マックスの心にまで届くように、  
少し大きな声で言った。

「マックスは私を幸せにする必要なんてない。私は勝手に幸せになるわ。」

でも、マックスも幸せじゃなきゃ、私も本当に幸せにはなれない。  
だからマックスも、幸せになって」

「ハル・・・」

「マックスが、私と一緒にいると幸せになれないって言うなら、  
私はマックスとは結婚しない。」

だけでもし、マックスが私と一緒にいた方が幸せになれるって言う  
なら・・・

私はマックスと結婚したい」

よく男の人は「幸せにするから」って言うけど、  
そんなの自惚れだと思う。

私を幸せにする・・・

その鍵を握るのは他でもない、私自身だ。

一緒にいることで、お互い自分のことを幸せにできるのなら結婚す  
ればいいし、

幸せにできないのなら、結婚するべきじゃない。

「マックス。私はあなたといれば、幸せになれる。  
マックスはどう？」

「・・・」

不意にマックスがその大きな手で私の頬に触れた。

思わず身体がビクツとなる。

マックスに触れるのなんて、初めてだ。

「冷たいね」

「・・・うん」

「ずっと待っていてくれたの？どれくらい？」

「5時間くらいかな・・・」

「5時間!？」

マックスが目を見開き、それから笑い出した。

「凄いなあ、ハルは」

「マックス・・・初恋の人に会ってきたの？」

今度は笑いはない。

純粹に驚いただけのようだ。

「本当に凄いね、ハルは。なんでもお見通しだ」

やっぱり・・・。

私は視線をマックスの顔から、その手元に落とした。

そこにはさっき私が渡した茶色い紙袋がある。

賽<sup>さい</sup>は投げた。

この紙袋の中のマフラーをマックスが付けてくれるかどうかは、もうマックスに任せるしかない。

マックスは紙袋を右手から左手に持ち替えた。

「うん。会ってきたよ。」

憎い目で見られるか、素っ気無い態度を取られるかは分からなかったけど、覚悟はできてた。

ミナトの言葉を聞いて、

ハルと結婚するためには、どうしてももう一度彼と会っておかない

といけないと思ったんだ」

だけどマックスは、まるで肩透かしを食らったかのような、拍子抜けした声になった。

「でも、彼は僕が思っている以上に大人だった。

いや、僕も心のどこかで分かってたんだ、彼のことを」

「・・・」

「怒られたよ」

「え？」

顔を上げると、困ったような笑顔と出会った。

「『ハルと結婚すれば、今度こそやり直せる気がする』って僕が言ったら、

『結婚するな』って言われたよ」

「ええ？」

「『立ち直るためにハルを利用するなら、それはハルに失礼だ。やめとけ。』

第一、立ち直るってなんだよ。お前、何か立ち直る必要があるのか？』だってさ」

「な！なんて勝手な人なの！？」

私は思わず、正直に思っていることを叫んだ。

昔、散々マックスのことをゲイだからと傷つけておいて、今度は女と結婚しようとしてるマックスに、失礼だからやめとけ、って！？

立ち直る必要があるのか？、って！？

どれだけ勝手なこと言えば気が済むのよ!!!

「だよね」

また苦笑いのマックス。

でも、本当に呆れている訳ではなくて、  
なんかちよっと嬉しそうだ。

マックスはさっき「僕も心のどこかで分かってたんだ、彼のことを」  
と言った。

つまりマックスは、彼に罵倒されに行ったけど、  
心のどこかで彼が自分に正直な気持ちをぶつけてくれるんじゃない  
かと期待してたんだ。

マックスが右手を上着のポケットに突っ込んだ。

「さっき、成田の搭乗ゲートまで彼が見送ってくれたんだ。

その時僕は彼に『結婚のこと、よく考えてみるよ』と言った。

でも、搭乗ゲートをくぐって免税店を見た瞬間、

『ハルのお土産に何を買おうかな』って考えてた」

マックスの右手がポケットから出る。

そしてそのまま私の左手を握り、手袋を外した。

かじかんだ手に、マックスの温かい体温が流れ込んでくる。

「手袋してるのに、手まで冷えてるね」

「うん」

「5時間もこんなところで僕を待ってるからだよ。・・・ありがとう」

マックスが、私の左手を掌に乗せたまま右手を開いた。

指に何か違和感がある。

自分の左手に目を向けると、  
その薬指に光る物があった。

「・・・指輪？」

「よかった、ぴったりだ」

マックスが照れくさそうに笑う。

「前に日本のサイズで7号だって聞いてたけど、  
実際に見たら7号って本当に小さいから、こんなので指に入るのか  
なって心配してたんだ」

「・・・」

細くすっきりしたデザインのプラチナリング。

その中央には小ぶりだけど眩いばかりの光を放つダイヤが埋め込まれている。

「免税店で買ったから既製品だし、全然婚約指輪っぽくはないけど・  
・いいかな？」

私は頷くこともできず、ただ指輪に見入った。

まるで瞬きすればそれが雪のように溶けて消えてしまうから、とでも言うように。

「2人で幸せになろうね、ハル」

ようやく目が指輪から離れた。

でも今度はマックスから目が離せない。

そうだ。

「2人で幸せになる」、

これこそ、サリーさんが言っていた「マックスを守る」方法なのかもしれない。

「マックス・・・」

「そ、そんな泣きそうな顔しないでよ。これだから女の子は苦手なんだ」

マックスはわざとガサゴソと音を立てて、私がプレゼントした紙袋を開き始めた。

そのタドタドしさに思わず笑みがこぼれる。

紙袋から、黒いマフラーが出てきた。

でも、マックスはその微妙な長さに首を傾げる。

「ネクタイ？」

「・・・そんな太いネクタイないでしょ」

「うーん、あ。分かった！」

マックスが目を輝かせ、

両手でマフラーを広げる。

「これが日本の腹巻ってやつかあ」

「・・・」



私は2人の未来に若干の不安を覚えた。

## 第27話 決心

昔々あるところに、春美ちゃんという”美”少女がいました。

春美ちゃんには大好きな男の子がいましたが、その男の子は春美ちゃんを弄んだ挙句、

春美ちゃんの尊敬する先輩と結ばれました。

しかし男の子は「俺はもっと男を磨くんだ」と言って、

「行かないで」と泣きすぎる先輩を残し、1人旅立っていきましたとき。

おしまい♪

「ハルには文学的才能はないみたいだね」

「まあね」

仕事は休めないけどランチくらいは一緒に、という訳で、

最近はマックスと一緒にランチデートをすることが多くなった。

だけどマックスの忙しさは半端ないらしい。

申し訳なさそうにしながらも、ランチの合間に書類を眺めることもしょっちゅうだ。

でも、いいの。

幸せですから!!!

「うふふ」

「・・・」

「ねえ、でもどうして湊君と私のことを聞きたかったの？ヤキモチ？」

「まさか」

・・・ちよっとくらい悩んでから答えてよね。

私は膨れっ面で、  
キノコがたっぷり入ったペロンチーノをスプーンの上でクルクル  
した。

「でも、ハルの話で分かったよ。この書類の意味が」  
「書類？」

「採用試験の最終選考に残った人達の書類。内緒だけどミナトのも  
ある」

「本当!？」

さすが、湊君!

でも、それと私達の昔話と何の関係があるの？

「ハルは関係ないんだけどね」

「・・・」

「面接の時、面接官が未婚者に対して『結婚の予定はありますか？』  
って聞いたんだ。

女性だと姓が変わるし、入社後に独身寮じゃなくて社宅に入りたい  
って人もいるだろうからね」

「なるほど。それで？」

「その時のミナトの返事が『もしかしたらするかもしれませんが』だ  
ったと書類に書いてある」

私は思わず口を開いたままフォークを止めて、マックスを見た。

「嘘」

「本当。ハルも知らないんだね。でも、もしかしてさっきの昔話に出てきた『先輩』かな？」

「そうに決まってる！そうでなきゃ、許さないんだから！」

ハッとしたけど、時既に遅し。

お店中の視線が私に向けられていた。

誤魔化すために咳払いをしながらお水を飲む。

「あはは。ミナトに振られたことをよっぽど根に持ってるみたいだね。

あれ？でも前ミナトが、自分もハルを好きだったって言ってなかったっけ」

「ま、ちよつとした行き違いがあつたの」

そして湊君は私を振った。

それなのに結局先輩とも別れるなんて！

ちゃんと男を磨いて先輩と寄りを戻さないと、許さないっ！！！

「つまりミナトは、ジュークスに入社できれば、『先輩』との結婚を考えてるって訳か」

「多分ね」

「・・・ふーん」

マックスは書類を裏向きにテーブルの上に置くと、

椅子に深く腰掛け、腕組みをして何かを考えだした。

背もたれには、めでたくマフラーへと昇格した腹巻（！）が掛けられている。

「・・・卒業は3月中旬で、入社は4月頭で・・・」

「どうしたの、マックス？」

「よし。決めた」

マックスがパッと顔を上げる。

まるで仕事中的のように真剣な表情だ。

（マックスが仕事してるとこ、知らないけど）

「何が？」

「結婚式は3月20日頃にしよう」

「え」

3月20日頃？

なんで？

しかも、もう2ヶ月切ってるし！

「間に合わないよ！」

「間に合わせるよ」

そう言うや否や、マックスは鞆からラップトップを取り出し、電源を入れた。

その表情はもはや「真剣」どころではなく、完全にビジネスマンである。

「・・・何してるの？」

「メール」

ふんふん、なるほど。

レストランじゃ堂々と携帯使えないもんね。

で、どうして急にメール？

「人事部のクラウドディアにメールしてる。教会とパーティー会場を押さえてもらわないと」

「そんなこと、クラウドディアさんに頼むの？自分達でやろうよ」

「ハル。悪いんだけど、それは無理だ。」

招待客の都合を聞いて、細かい日程調整をしないといけないからね」結婚式って普通、こっちが勝手に式の日取りを決めて、招待するお客さんに「この日に来てください」って言うもんじゃないの？

が、ジュークスの幹部ともなると、その辺の感覚まで違うらしい。

「関係企業の重役や政治家、著名人も招待するからね。こっちの都合だけでは決められないんだ」

「・・・はあ。そういうものですか」

それでマックスがこんなにビジネスライクになってる訳ね？普段のおっとりしたマックスとはまるで別人だ。

私がおはや異世界なお話に呆然としていると、ビジネスマン・マックスが、急にいつものマックスに戻った。

「でも、どんな式やパーティにするかは僕達で考えようね。僕達の結婚式なんだから。」

ハルはまず、ウエディングドレスを作らないとね」

ウエディングドレス！！！！

アメリカにもゼクシイってあったかしら、と、私の頭は早速花嫁さんモードに突入した。

「おめでとう、は？」

「そっちが先に言ってお下さい」

「合格、オメデトウ」

湊君は「やった！」と満面の笑みで両手を挙げて万歳した。

マックスに私と湊君の昔話をしてから1週間。

無事、ジュークスから湊君に内定が出たのだ！

ジュークスの場合、内定通知は内定証書を郵送して行うらしいけど、湊君には、伝書鳩よろしく、私がマックスから証書を預かってアパートまで持ってきた。

「これで俺も4月から社会人かぁー！よしっ！」

湊君が改めてテーブルに広げた内定証書を惚れ惚れと見つめた。

「試験勉強、大変だったんですよ！短期間だったし！でも、頑張った甲斐があった！」

「ふふふ、よかったわね」

「はい！ありがとうございます！」

「じゃあ次は、私に婚約おめでとう、って言ってよ」  
「・・・嫌です」

とたんに湊君のテンションが下がる。

もう。相変わらずなんだから。

湊君、マックスの部下になるのよ？

そんなんで大丈夫？

「まあいいわ。はい、こっちの書類もマックスから預かってきたの」

私は、内定証書が入っているのとは別の、  
水色の封筒を湊君に差し出した。

「なんですか、それ？」

「社宅借用申請書」

「社宅？」

「既婚者用のね。マックスが、ミナトには独身寮入寮申請書よりこっちがいいだろうって」

「既婚者用・・・」

湊君は私が差し出した封筒を受け取ることも忘れて、  
それを眺めた。

「結婚。するつもりなんでしょ？」

「それは・・・まあ・・・いつかは・・・」

でも、今すぐなんて・・・向こうがどう思ってるか分からないし」

珍しく自信無さ気な湊君。

こういう時こそ、いつもの明るさと元気良さで突っ走らなきゃいけ



ないのに。

「俺、どっかの猪突猛進娘Sとは違って地道に頑張るタイプなんですよね」

「そんなこと言っていると、他の男に取られちゃうわよ」

「・・・」

「とにかく、社宅の説明書を見て！そして借用申請書を書いて！ついでにプロポーズしてきなさい！」

「どーゆー『ついで』ですか」

それでも湊君はようやく私から水色の封筒を受け取り、中の書類を取り出した。

借用申請書と一緒に、社宅の地図や間取りが書いた紙が何枚もある。

「すごい。全部ちゃんとした庭付き一戸建てだ。さすがアメリカ」

「あはは。どれも結構大きな家ね。あ、この家素敵」

「ほんとだ。でも会社からちょっと遠いな」

「そっか・・・あ、こっちは？」

「うん、よさげ」

マックスの実家で暮らすことが決まっている私は、新居選びという楽しみだけはない。

だからここで疑似体験させてもらおう、とばかりに、私は湊君以上に真剣に社宅の間取りに見入った。

「あれ？この社宅、私とマックスが結婚式を挙げる教会のすぐ裏だ」「じゃあ却下」

「もう、どうしてよ。先輩もパーティに呼ぶから、この社宅なら再会してすぐに先輩としけこめるわよ」

「春美さん、しけこめる、って・・・え？先輩も呼ぶんですか？日

本から？」

「当然でしょ」

湊君が、目を大きくしたまま固まる。

「湊君も招待するから来てね。先輩に会えるわよ。・・・2年ぶりよね？」

「・・・はい」

「全然会ってないの？連絡も？」

湊君が首を横に振る。

「春美さんは・・・会ってるんですか？」

「うん。日本に帰った時は必ず会ってるわよ。私のお姉さんみたいな人だもん」

「先輩、元気ですか？」

「元気よ」

「・・・そうですか」

もっと聞きたいことがたくさんあるだろう。

でも、聞きだせばきりがなし、

会いたいという気持ちを抑えられなくなるのが分かっているからなのか、

湊君はそれ以上、聞いてこなかった。

代わりに、教会の裏手にある社宅の間取り図を手取る。

「場所はともかく、いい家ですね」

「でしょ？」

「庭が広い。これだけ広かったら・・・思いつきり走り回って遊べ

ますね」

湊君はテーブルの上に転がっていたボールペンを手に取り、書類に向かった。

## 第28話 元カノ

「えー！？じゃあ、湊さんも結婚しちゃうんですか!？」

家に帰ってユリアちゃんに、湊君のジュークス内定と結婚について話したら、

ユリアちゃんは心底ガツカリしたような声を出した。

「私の結婚は素直に喜んでくれたじゃない」

「そりゃそうですよ。でも湊さんはユリアの初恋の人なんです。単なる憧れみたいなものですけど・・・結婚しちゃうのは、やっぱり寂しいな」

しょんぼりとするユリアちゃん。

男の子だと知らなければ、世の男性諸君は思わずぎゅっと抱き締めたくなるところだろう。

「でも、まだプロポーズした訳じゃないですよね？」

「うん。まだよ」

「じゃあ、もし湊さんがその先輩に振られちゃったら、ユリアが湊さんと結婚します!」

無理じゃない？

「だって、せっかく借りた社宅が無駄になっちゃうじゃないですか!」

「無駄になる可能性があるなら、私も湊君に社宅を借りるように勧めたりしないわよ」

私が澄ましてそう言うと、  
ユリアちゃんはますます落ち込んでしまった。

「あ、そっか・・・お姉様はその先輩とちよくちよく会ってるんですよね。」

それで、その先輩も湊さんのことをまだ好きだって知ってるんですね？」

「そういうこと」

なんとなく癪に障るから、湊君には言っていないけどね。

「なんだ・・・じゃあもうプロポーズの返事は決まってますね。いいなあ、その人。」

ユリアのファーストキスは絶対湊さんと、って思ってたのに、実現できそうにありませんね」

「ああ、頼んだらしてくれるんじゃない、あの奇行師なら」

「奇行師？ 貴公子じゃなくて？」

いや、絶対貴公子じゃないだろ。

だけど私はふと、湊君にキスされたことを思い出して、思わず赤面した。

「あー・・・お姉様、もしかして湊さんと・・・？」

ユリアちゃんが横目で私を睨む。

女の嫉妬は恐ろしい。

「知らないわよ！ 向こうから勝手にしてきたんだから！」  
「・・・お姉様、その後マックスとキスしました？」

「してない。そもそもマックスとキスなんてしたこと、」

言い終わらないうちにソノ異変に気が付き、

私は、日本のように絨毯がひかれている床の上を、  
座ったまま退いた。しりぞ

でも、私が退いたのと同じ距離だけユリアちゃんが近づいてくる。  
長いまつげの瞳を閉じ、唇をんーっと突き出しながら。

「や、やめ・・・」

むちゅっ

抵抗する間もなく、グロスがツヤツヤと輝くユリアちゃんの唇が、  
私の唇に押し付けられた。

グロスがついちゃう！

「うふっ」

ながーいキスの後、  
ユリアちゃんが満足気に私から離れる。

「うふっ、じゃないわよ！」

「これでユリアと湊さんは、間接キスをしましたー！」  
「私を間接に使わないで！」

これだから最近の若い子は！  
何考えてるのよ！

「直接湊君にやってって頼んでよ！」

「頼んだことあります」

「へ？」

「夜中に湊さんの部屋に押しかけて、『キスしてください！』ってベッドに押し倒したら、

首根っこ掴まれて部屋の外に放り出されました」

「・・・」

さては湊君。

それでユリアちゃんを私に押し付けたのね？

それにしても、湊君がユリアちゃんを猫のように部屋の外に放り出してる図って・・・

笑える。

「でも！これでユリアも湊さんとキスできました！」

「あっそ」

さっきの湊君のように万歳をするユリアちゃん。

勝手に解釈してちょうだい。

今頃湊君は悪寒を感じていることだろう。

・・・それにしても。

私は人差し指で自分の唇にちょっと触れた。  
グロスの感触がする。

ユリアちゃんは性別は男だけど、  
私の中では完全に女の子だ。

なんか、女の子にキスされた気分。

「気持ちいい、またしたい！」とは思わないけど、嫌な気分じゃない。

間接キスのためとは言え、ユリアちゃんも私を嫌いならキスしたりしないだろうから。

ふーん、同性からキスされるって、こういう気分なのね。

・・・ふーん。

「猪突猛進って日本語、知ってる？」

「ハルミみたいな人のことでしょ？」

さすがマックス。

日本語も私のことも良く分かってる。

お馴染みのランチデートを終えてジュークスへ戻る途中、私は猪突猛進娘らしく、猪突猛進することにした。

でも、漫画のようにスマートには行かない。

私はマックスに、かがんで、と言うように、ちょいちょい指を曲げて見せた。

そしてマックスが「何？」と言う前に、



チュッと音を立ててマックスの唇にキスをする。

「お仕事、頑張ってね」

「あ・・・うん」

ゲイとか関係なく、アメリカ人はこんな事慣れてるだろうに、それでもマックスは照れたようににはにかんだ。

「本当に猪突猛進だね、ハルは。」

日本育ちの日本人はこういうことあんまりしないんでしょ？」

「アメリカ人みたいに、親しい人全てにする訳じゃないけど、彼氏とか夫にはするわよ」

ほんと言うと、

口にキスするか頬にキスするか、一瞬悩んだ。

でもここは猪突猛進の名に恥じぬよう（？）、口を選ばせて貰おう。

「マックス。先を急ぐ必要はないよ。私待ってる」

「・・・うん」

「でも、キスだけは私の愛情表現だと思って許して」

「うん。それはいいんだけど・・・」

マックスが身を起こして、左の方を向いた。  
私もつられて同じ方を見る。

そこには、ランチから戻ってきたジュークスの社員らしき人たちがたくさん。

道端でのキスシーンなんて、珍しくも何ともないだろうけど、その片方が自分の会社の専務となると、やはり気になるらしい。

いろんな色の目が興味津々に私達を見つめている。

あら、みなさん。

何か御用？

って、恥ずかしいし！

私は赤面し、マックスが苦笑する。

と、その野次馬の中から1人の女性が笑顔で私達の方へ歩いてきた。

「仲がよろしいことで」

「あ、クラウドディアさん！」

ジュークスの人事部の美女、クラウドディアさんである。

仕事絡みのこともあるので、私達の結婚式の手配をお願いしている。

「色々ありがとうございます」

「いいえ。専務、お日取りですが、3月22日に決まりそうです。よろしいでしょうか？」

「ああ。ありがとう。もう少し早いほうが良かったけど、仕方ないね。

それで進めてくれ」

「かしこまりました」

もう少し早いほうが良かった？  
どうして？

私がそう思ってマックスを見ると、マックスは軽く頷いた。

「僕達の結婚式で、ミナトは彼女と再会してきつと寄りを戻すだろ？  
3月中旬から4月までの間なら、  
ミナトは高校を卒業してるし、まだ入社もしてないから時間もある  
と思って」

「・・・それで式をその頃にしたの？2人にゆっくりできる時間を  
あげるために？」

「ああ」

マックスがわざとらしく肩をすくめる。

「ミナトはハルの弟分だからね。ちょっとは恩を着せとかないと」

「・・・つぶ。なるほど。ありがとう、マックス」

「どうしてハルがお礼を言うの」

「湊君の姉貴分ですから」

「そうか。そうだね」

やっぱりマックスは優しいなあ。

ほんわか恋人モードに入っていると、  
横から咳払いが聞こえた。

あ。クラウドディアさんのこと、忘れてた。

「ところで専務。私もパーティに参加させて頂いてよろしいのでし  
ようか？」

「え？もちろんだよ。どうして？」

「いえ、昔の恋人に来られるのはお嫌かと思ひまして」

なぬ？

一気にほんわか恋人モードが吹っ飛ぶ。

「サカガミ様、ご安心ください。専務はちゃんと女性経験が  
おありですから」

「・・・」

「ク、クラウドディア、それは・・・」

口ごもるマックス。

もしや、サリーさんが言ってた、  
昔マックスに強引に言い寄った女って・・・

「では、失礼致します」

クラウドディアさんは私にウィンクすると、  
魅惑的な腰を振りながらビルの中へ入って行った。

「・・・マックス・・・」

「な、なに？」

「・・・マックスの・・・」

「うん？」

「バカー！！！！！！」

この後結婚式の日まで、

いや、結婚式の後も、

私は「ジュークスのビルの前で専務をバカ呼ばわりした女」として、  
広く知れ渡ることになるのだった。



## 第28話 元カノ（後書き）

次回最終話です。

## 第29話 Wedding party

私は大きく開け放たれた窓にもたれて、黄金色のシャンパンに口をつけた。

部屋の中央には、溢れんばかりの笑顔の2人が寄り添うようにソファに座っている。

「幸せそうだね」

私の右隣に、同じグラスを持ったマックスがやってきた。その左手の薬指にも、私と同じ指輪が光っている。

「ほんと。私達にもあんな頃があったなー」

「まだ結婚式から3ヶ月しか経ってないじゃないか」

「そうだけど！結婚式って、終わってしまえば一気に遠い過去のことになっちゃうんだもん。」

私にはもう二度とあの瞬間は訪れないのね・・・もっと楽しめばよかった」

「あはは。でも僕はあの時より今の方が幸せだよ」

またさらっとそう言うこと言うんだから。

もう。

恥ずかしくなっちゃうじゃない。

「ハルは？今、幸せ？」

私は夏の爽やかな夜風を思い切り胸に取り込んで、「うん！」と大きく頷いた。

私とマックスの思惑通り、  
私達の結婚式で寄りを戻した湊君と先輩が、  
今日、結婚した。

いや、二人が入籍したのはもう3ヶ月ほど前のことだけど、  
一昨日先輩がアメリカへ引っ越してきて、  
今日この杜宅の裏にある、私達が挙式したのと同じ教会で結婚式が行われた。

今は沢山の友達と一緒にホームパーティの真っ最中だ。

私だけでなく、マックスもちゃんと招待されていることから分かるように、

マックスと湊君は「一応」良好な関係を保っている。

まあ元々マックスは、あんなこと言われておきながら湊君を悪く思っていないし、

湊君もちゃんと私達の結婚式に来てくれて「どうなっても知らないからなー」なんて言いながら、  
お祝いしてくれた。

マックスも湊君と先輩のことをとても喜んでいる。

湊君曰く、先輩と会えなかった2年間よりも、

再会から今日までの3ヶ月の方が長かったという。

それだけ、先輩がアメリカへ引っ越してくるのが待ち遠しかったのだろう。

白いシンプルなドレス姿の先輩は、昔とは随分変わった。

昔は・・・湊君と出会う前の先輩は、もっと肩肘張った女性だった。



それが湊君と付き合い始めてから変わり、  
この2年3ヶ月でまた変わった。

相変わらずキリッとした顔立ちではあるけど、  
その目は優しく、おおらかさを感じる。

ユリアちゃんなんて、私の結婚式で初めて先輩と会ったときこそ、  
「この人が湊さんの彼女なんですか!？」と敵意丸出しだったけど、  
今では「お姉様より『お姉さん』らしいです」と言って先輩にすっかり懐いている。

そうそう、今向こうの部屋でリザとケーキを食べてるそのユリアちゃん  
なんだけど、

私が結婚してアパートを出たのを機に、

なんと湊君の社宅へ転がり込んだ。

その理由は、

湊君と一緒にいたいから、ではなく、「お姉さんと一緒にいたいから!」。

と言っても一昨日までは先輩はまだアメリカに来ていなかったから、  
実質湊君とユリアちゃんの二人暮らしだったのだけど、  
もう湊君が貞操の危機に瀕することはなかったようだ。

先輩も先輩で、「妹ができたみたいで嬉しい」とユリアちゃんの居候を喜んでいる。

ちょっと。

先輩の「妹」は私よ?

せっかくこれから先輩との姉妹ライフを楽しめると思ってたのに、  
邪魔しないでよね!

だけどさすがのユリアちゃんも、

「お姉さんが引っ越してきてからしばらくは、ユリア、湊さんの家にいない方がいいですよね？」

2人のお邪魔しちゃ悪いですよね？」

と、珍しく殊勝なことを言っていた。

でも、その心配は無用だった。

先輩が「どうせ2人きりじゃないから、気を使ってくれなくていいのよ」と言ったからだ。

マックスがシャンパンを少し飲み、ため息をついた。

「まさかミナトに子供がいたなんてね」

「今更何言ってるのよ。私達の結婚式の時に会ったじゃない」

私とマックスは同時に、

湊君と先輩の間にちょこんと座っているソレを見た。

いっちょまえにタキシードなんて着てるけど、

さっきこの家の大きな庭に大興奮して遊びまくってたから、すっかりドロドロだ。

顔立ちは基本先輩似。

でも、クリクリした子犬のような目は間違いなく湊君譲り。

かわいらしいったらない。

「2歳だっけ？」

「うん」

「そうか・・・」

珍しくマックスが会話を続けてくれない。  
ただひたすら湊君と先輩の子供に見入っている。

一方湊君も、私達や招待客のことなんて全然目に入っていない。  
ただひたすら先輩と子供に見入っている。

今までずっと離れて暮らしてきたのに、

3人はまるでずっと一緒にいた家族みたいだ。

湊君と先輩の間に流れる空気も、恋人同士の情熱的なそれではなく、  
このまま永遠に続くのではないかと思えるような穏やかで平和なものだ。

そして実際、永遠に続いていくのだろう。

私達のように。

マックスが視線はそのままに、突然話を変える。

「ミナト、凄く仕事を頑張ってるよ」

「そう、よかった」

「もうすぐ大学入試だけど、それは間違いなく受かると思う。」

「MBAも8年以内にちゃんと取るだろう」

「・・・マックス、羨ましいの？」

「え？」

「ふふふ、分かるよ」

声や話し方で、マックスが考えていることなんて手に取るように分

かる。

忙しいマックスは、まだMBA取得を本格的には考えていない。もちろんいつかは取るつもりだろうけど、今まさに目の前で頑張っている湊君を見ると、自分も早く取りたくなるのだろう。

案の定、マックスは「また見透かされた」と言って笑った。

「でも僕もミナトに倣<sup>なら</sup>うよ」

「どういうこと？」

「MBAの前に、やることがあるよね」

マックスの視線はさっきからずっと同じ場所にある。

湊君がチラッと私とマックスの方を見て、子供に何か耳打ちをする。子供はニコッと笑うと、急に立ち上がって私達に向かって走り出した。

マックスの視線もそれと一緒に動く。

「どうしたの？」

私がかがみこむと、湊君の子供は大きな声の日本語でこう言った。

「オジチャン、オバチャン！早く僕のお友達を作ってね！」

オバチャ・・・！

私はギロツと湊君の方を睨んだけど、

湊君は「結婚したら春美さんも所詮ただのオバチャンですよ」と言わんばかりにそっぽを向いた。

湊君……。

あなた今、全ての既婚女性を敵に回したわよ？

「ハル？その子、今なんて言ったの？」

マックスが怒っている私を不思議そうな目で見る。

「べ、別に！」

すると湊君の子供は、今度はマックスに笑顔を向けた。

「Please make your baby！」

こ、ここら！

そういうデリケートな問題を！

まあ、子供が言うて罪がないけどね。

……だから子供に言わせたのね？

湊君の子供はそれだけ言うて一目散にパパとママのところへ走って行った。

湊君は「ちゃんと言えたか？」なんて言いながら子供の頭をなでている。

「だってさ」

マックスが笑う。

「もう・・・」

「ま、僕は急がないけど」

「私も急がないもん」

「だけど2人ともそれじゃあ、いつまで経っても子供はできないね」

だから。

そんな遠まわしな言い方をしても、私には分かるんだって。

マックスが何を考えているのか。

私はシャンパングラスをマックスに渡した。

「お酒はしばらくやめた方がよさそうね」

「そうだね。僕も付き合うよ」

マックスが近くのテーブルにシャンパングラスを二つ、並べて置いた。

マックス。

またいつか一緒にシャンパンで乾杯しようね。

私達と、

私達の新しい家族のために。

——  
「Get married!  
完  
——

## 第29話 Wedding party（後書き）

最後まで読んで頂き、ありがとうございます！

タロウの他小説をお読みの方はお気づきかと思いますが、タロウの小説はあちこち繋がっています。このお話も1年以上前に別の小説を書いていた時から練っていた物で、ようやく日の目を見ることができました。

ちなみその「別の小説」というのは、マックスがチラッとだけ出てくる「先生の彼女!」という物です。

他に「Get married!」と繋がりのある小説としては、春美と湊が出てくる「I wanna be…」(R18の為、ムーンにて掲載)があります。「triangle」には大人になった湊も出てきます。もしご興味があればそちらもどうぞ。ありがとうございました。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8231s/>

---

Get married!

2011年7月22日14時10分発行